
El loto florece eternamente.

狹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E1 lotto florence etername nte .

【EZコード】

N7741X

【作者名】

狛

【あらすじ】

藍染との戦いも終わり、一護は靈力を失い死神代行としての任務を終えた。その一年後。靈力が高まり始めた夏梨は亡き母、真咲の夢を見る。そしてその日、突如現れた大虚に襲われた。 注意書き 必読！更新遅めになると思います（汗）

Attention!

注意書きです。

これはBLEACHの一次小説です。故に作者の多大な解釈と妄想が織り込められています。

時期的には藍染との戦いが終着した後、一護が靈力を失つてから一年くらいです。

夏梨ちやんと遊子ちやんは小六です。

そしてここからが一番重要！

作者は、BLEACHの漫画は死神代行喪失篇からしか持つてません

全巻読んだことには読みましたが、アニメすら見てないのと細かい設定などは曖昧だったりします。

なので、「このキャラはいたな」と言わない」などありましたらお知らせください。

あと、文字化けする漢字は他のに置き換えるつもりなのですが
お願いします。

では次から本編です。

Threat, and Desire. (前書き)

脅迫、そして切望。

雨の中、泣いていた。

橙色の鮮やかな髪は、曇天の空に良く映える。

地面に広がる紅は、色を失くした世界に酷く映える。

『母ちゃん』

泣いていた。

己を責めた。

決意した。

誰も死なせない、絶対に護ると。

力を手に入れた。

護るものが増えた。

焦つた。

自分には、その全てを護るだけの力がないと。

欲した。

もつと、もつと。

みんなを護る力が欲しいと。

彼は応えた。

我が意は主にあると。

だがそれは太陽を追い詰める。

護るものがあればあるほど、それは太陽を追い詰め、苦しめ、縛り殺す。

脅迫。

そして、

彼は護る力の全てを失つた。

＊＊＊

それはいきなりの出来事だった。

雨が降っていた。

一番近くに感じていたものが、ぱつたりと感じられなくなつた。

いなくなつた。

同じ日に生まれた片割れは酷く泣き、

【一つを護る】と付けられた兄は酷く己を責めた。

漆黒の髪を持つその少女は深く悲しみ、無力な自分に腹を立てた。

泣かなくなつた。

少しでも強くあらうと決意した。

無力は歯痒い。

力が欲しい。

今まで護つてくれた兄を、

母の代わりを務めた姉を、

護りたい。

力が欲しい。

黒曜石の瞳は前を見つめる。

雲の合間から、光から、声が聞こえた。

「 んうちゃん、夏梨ちゃん！」

酷く寝覚めの悪い朝だつた。

覚醒する意識の中で色素の薄い髪が田の前で揺れる。

「 夏梨ちゃん、寝過！」 ちひつみー。

やせゆせと揺ゆがる双子の姉を、やせゆせつと見つめる。

姉 遊子は心配そうな声を漏らす。

「 具合が悪いの？」

「 ……んーん、眠かつただけ。一兄は？」

「 もひ起きあつてゐる。早く下りつてしまつてね？ 下で待つてゐるから」

ぱたぱたとスリッパの音が遠ざかる。

漆黒の髪を持つ少女は田を擦りながら急に身体を起しき。

「……変な夢」

そして頬を叩き、蹴ると、着替えて部屋を出た。

「夏梨ちゅ わあああん！…」

リビングの扉を開けて田に飛び込んでくる髭面の男。
夏梨と呼ばれる少女はわいつと避けると、そのまま男の後頭部
に踵を打ち付ける。

また慣性の法則で廊下に飛び出した男をそのままに、中に入り扉
を閉めた。

「ちよつとー？ 夏梨ちゃん！…？」

廊下から聞こえてくる足音を余所に、何時もの席に座る。

「一兄おはよ」

「おはよ。珍しいな、夏梨が俺より遅いって」

「ちよつと寝心地が悪かつただけだよ。最近、靈が無駄に寄つてく
るしね」

淡々と白米を口に運びながら、真横にいた男の靈に肘鉄を食らわせ
る。

橙色の髪を持つ兄には、夏梨がただ腕を動かしたようにしか見えな
い。

「夏梨ちゃんも大変だね」

遊子は驚すらと靈を見ることが出来るが、ただそれだけ。

夏梨は靈が見える、聞こえる、触れる。幼い頃から靈感が強かつた。
橙の髪を持つ兄、一護にもかつては靈感があつたのだ。夏梨と同等、
またはそれ以上の靈感により“異形”なるものさえ寄つてくる事も
あつた。

“異形”なるもの、^{ホロウ}虚と呼ばれるそれは魂を喰らつ。

いわば悪靈。

そして彼は“死神”だった。

漆黒の袴を身に纏い、刀を奮い虚を滅する者。

だがそれは過去の話。今の彼には靈に触れるどころか見る」とやがて叶わない。

「ねえねえ！ 無視しないでよー。お父さん寂しくて泣こちやうよー？」

先程夏梨によつて蹴り出された男もまた死神だ。その事実を知るのは一護のみ。

「ハハハヒゲ」

「ぬわあああん！－ 最近夏梨が冷たいよおおおーー。」

これは全て口課。変わることのない日常。

だが、この時既に歯車は狂い始めていた。

異常な音を奏で、確実に。

＊＊＊

南頂した太陽が照り付ける。

時刻はちょうど十一時。

窓から射す日光を浴びながら、夏梨は顔を青ざめ机に突っ伏していた。

(……気持ち悪い)

頭痛と吐き気。授業終了の鐘が鳴るまで残り二十分。

拳を握り、何とか堪えていたのだが、やむなく手を挙げた。

「先生、具合が悪いので保健室行つてもいいですか」

普段は真面目で、ショットチャウ男爵に混じってサッカーをしていた夏梨には珍しい事だ。

担任の女教師は驚き、すぐに行くよう促す。

教室を出る際に、心配そうな顔をした遊子と田が合った。

「うー……だる……」

初めて入った保健室のベットに横たわる。

ものの数秒、夏梨の意識は闇に沈んだ。

＊＊＊

『夏梨……』

「 ッ ! !

はつとして目が覚める。ドクドクと心臓が早鐘を打ち、全身が汗で濡れていた。

（またお母さんの夢……）

懐かしい、嬉しいはずなのに。

この言い知れぬ不安は何だ？

『夏梨、呼んで?』

優しく微笑む姿は幼い頃の記憶と同じ笑顔。

時計に目を遣れば、長針はちょうど三時を指していた。

十五分しか寝ていない。それなのにとても長く寝ていたような。

オオオオオオオオオオオ

突然のしかかる重圧。夏梨の脳裏に白色の化け物の姿が浮かぶ。

一護には言つていなかつた。彼が死神としての能力を失つた時から、夏梨は幾度か虚に襲われている。

無力な子供が死なずに済んだのは、怪しい駄菓子屋の店主のお陰だ。縁のある帽子を目深に被り、甚平に羽織りという格好の店主は一護に戦いを教えた張本人であり、彼もまた死神だ。

オオオオオオオオオオオオオオオオ!

悶ましい声に身を震わせる。

その化け物の狙いが自分であることに気が付いていた。

夏梨は保健室を飛び出し、教室へ荷物を取りに戻る。

「夏梨ちゃん！？」

「「あん遊子！ 具合悪いから帰る」

止められる前にランドセルを背負い学校を飛び出す。

ランドセルの中には対虚用の電磁捕縛丸が入っている。言わずもがな、駄菓子屋『浦原商店』店主の浦原喜助から貰つたもの。

『虚に襲われたら店に来てください』

そつ言われて渡されてからまだ口は浅い。

言われたように浦原商店へ走るが、突如目前に現れた虚に足を止めた。

今まで見たどの虚とも違っていた。

姿形も、大きさも、感じる重圧も。

町すら飲み込んでしまった。そのほど大で、鼻の尖った奇妙な面は静かに夏梨を見下ろす。

恐怖。

「な、んだよ、これ……」

足が竦む。感じたこともない恐怖に歯がカチカチと鳴る。

動けなくなつた夏梨をよそに、その虚は歯を剥き出した獰猛な口を大きく開き襲い掛かつた。

歯は夏梨の身体に食い込み、尋常でない痛みに夏梨は絶叫する。

メノスグランデ
大虚メノスグランデと呼ばれる虚は夏梨に歯を立てたまま天を仰ぎ、そこから来たのだから、空間の裂け目に吸い込まれるようにして消えた。

そこには血だらけになつた子供が倒れているだけだった。

カラソ。

下駄の音と共に突然現れた男。

浦原は夏梨を見て、その周辺を見回す。

眉に皺を寄せた。

(……おかしい)

夏梨を抱き上げ、口許に耳を当てる。微かながらに聞こえる呼吸の音。

「これはまた……荒れそうですね……」

そつ一言残し、次の瞬間には消えていた。

四限目の途中だった。

「先生、保健室に行つてきます」

「先生！ あたしも！」

「……」

滅却師である石田に井上、チャドが廊下を駆けていく。

また虚か、と他人事のように思う自分が心底嫌になる。

だが、少しして井上から掛かってきた電話に、俺は血の気が引いた。

「……何だつて……？」

「夏梨ちゃんが、虚に襲われたつて……」

頭の中が真っ白になる。

夏梨が、何で……。

「夏梨は無事なのかー!？」

「分からぬい……とにかく浦原商店に来てもらひえるかな」

電話越しで井上の声が震えていた。無傷ではないことが嫌でも分かつてしまつ。

電話を切ると、すぐに浦原商店へ向かつた。

「お久しへりつス、黒崎サン」

一年前に、最後に見た時と変わらない姿。

「夏梨は……！？」

「彼女なら今横になつてますよ」

中に入らうとして、浦原さんに制止される。

いつもの飄々とした笑みはそこになかった。射るような目に見られ、危うく出かかった言葉を飲み下す。

「最初に言つておきますが、妹サンは死んではいません」

そんな言葉はいらない。“死んではいない”。その言葉の裏にある事実は何なのか。

「ですが生きてこぬとも言えません」

無情に響く。

「ビハニハ」とだよ……。」

「彼女の魂魄がないんスよ」

魂魄がないのに、死んではいない……？

「どうやら大虚に襲われたよつて、微かに靈圧が残つてました」

「大虚……！？」

何故、ビハニハ。

必死に理解しようつて、浦原さんの言葉を反芻せせる。

ふと脳裏におふくろの姿が過ぎる。

また、護れなかつた……？

「なんで……あんたら助ける」とぐらぐら出来ただろ！？ 何で助けなかつた！」

違う。浦原さんのせいではない。そんな事くらい分かっている。

俺のせいだ。

「……すみません。アタシもうつかりしていたもので……大虚から靈圧を感じなかつたので出遅れたんス。すみません」

胸倉に掴み掛かつても、浦原さんはその手を外そつとしなかつた。

やり切れぬ思いが蟠る。わだかま

「……夏梨に会わせてくれ」

顔が見たい。魂魄がなくても死んでいない事には変わりない。

浦原さんは瞠目した後、静かに額き引き戸を開けてくれた。

部屋に敷かれた布団の上に、顔面蒼白になつた夏梨の姿。

普段からは考えられない痛々しい姿に胸が痛む。

傍らには井上が座し、三天結盾で傷を癒していた。

徐々に血が止まり、傷が塞がつっていく。

「黒崎サン、遊子サンには……」

「言えるわけねえだろ……」

「……ですよね。彼女には申し訳ないスけど、こちラで適当に、まかしておきましょ」

パチン、と扇子を閉じる。

俺はそつと夏梨の髪に触れた。

「夏梨サンの魂魄はこちラで捜しますので、アナタは遊子サンの側にいてあげてください。次は彼女が襲われるかもしれないの」

「……分かった。サンキューな」

本当は捜しに行きたい。だが力のない俺では協力するどころか足手

まことにしかならない。

体よく弾き出されたのは分かる。それに従わざるを得ない事も。

(畜生……！)

雨が降っていないのが、せめてもの救いだった。

* * *

チリン。

日が沈み、月が顔を出した頃。浦原商店に一匹の黒猫が訪れた。

「いんばんは、夜一さん」

艶やかな漆のモに賢そうな黄色い日は浦原を見遣り、布団に寝かされた夏梨に近付く。

しばらく彼女の枕元に座りじっと見詰めていたが、不意に頭を上げた。

「このよつな事が有り得るのか？　この娘、魂魄が入つておらんぞ」

黒猫から發せられた声に驚く様子もなく、浦原は扇子で肩を叩く。

「いや、アタシも信じられないんスけどね。大虚が靈圧を消したのにも驚きましたが」

黄色の瞳が細まった。

「……藍染か？」

「その可能性が高いよつで。彼の実験体ですかねえ」

「……して、この娘の魂魄は何処へ行つたのだ」

「アタシの予想としては、『虚圈』ではないかと」

大虚に襲われて消えた魂魄。単純に考えて連れ去られたのではない

か。

だとすれば、虚の住む世界である虚圈にいると考えて妥当だ。

「夜一 もん、明日にでも石田サン達を連れて行つてもいりますか」
「もとよりそれを頼む為に呼んだのだろう。断る理由もない。わ
しに任せおけ」

その言葉のみを残し、黒猫は闇の中へ姿を消した。

* * *

つんと鼻にくる鉄の臭い。

浮上した意識と共に身体を襲う激痛。

「 つ、いてえ……」

夏梨はゆっくつと身体を起し、

肩と脇腹から流れ出る血に、小さく舌打ちをする。

巨大な化け物に喰われそうになつたところまでは覚えている。だがその後、激痛に発狂し意識を失つた。

此処は何処なのか。

傷を手で抑え、ゆつくりと辺りを見回す。

そこは随分と寂れていた。所々に建つてゐる古めかしい家は廃れているものが多く、中には半壊している家もある。

「……あの世か？」

いや、それなら痛みなどあるわけない。

ぼんやり眺めていると、背後から足音が近寄つてきた。

そのまま振り返れば、刀を携えた男。

「斬らせろ」

鋭く光る刃は獰猛な獣を思わせる。

その男だけではない。何処にいたのか、気付けば夏梨は囮まれていた。

「何だよ、ここから……」

痛む身体に鞭打ち、ふらつきながらも何とか立ち上がる。

突然の事に混乱する中で、その者達の格好が着物であることに気付く。

夏梨からすれば異様だが、明らかにタンクトップとスペッツ姿の夏梨の方が場から浮いていた。

「殺せろ

「斬らせろ」

口々に吐く言葉は呪詛に近い。

逃げられずにはいる夏梨に、男が斬り掛かった。

それを合図に次々と男達が刀を振るつ。

何とか身を交わすが、避けきれなかつた太刀が一線を描き傷を刻る。

「あ、あ、……っ……」

焼けるように疼き、激痛に意識を飛ばしそうになる。

死にたくない。

脳裏に浮かぶのは家族の姿。爛漫に微笑む遊子に、死神姿の一護。

まだ、死ねるかよ

黒曜石の目が鋭く光つた。その瞬間、空気が波打つ。

刹那。

水の滴る音。

気付いた時には既に夏梨を除いて立っている者はいなかつた。

「あ……？」

今、何が起きた？

何の前触れもなくいきなり倒れた男共を見下ろし、眉間に皺を寄せる。

死んではない。意識を失っているだけ。

白田を向いている顔を覗き、頭を軽く叩く。起きる気配はない。

夏梨は着物の袖を刀で裂き、患部にくるくると巻いた。出来れば膿まないうちに消毒もしたかったのだが、このような場所にあるとは思えない。

その村は、よく見れば死体が遺棄されていた。どす黒く染まった地面は血の跡だらけ。

襲われたにも関わらず、頭の中はやけに冷静だった。すぐに此処を離れた方が良い、と本能がそう伝える。

夏梨は護身用に刀を持ち、その村を離れた。

乾風が砂を巻き上げる。

程なくして、そこに一人の男が現れた。

「何もいねえじゃん」

黒の死霸装を身に纏い、綺麗に剃られた頭、目尻に朱を挿した男は声を荒げる。

「技術開発局の誤認か？」

「……いや、そうでもないみたいだよ

切り揃えた黒髪に、眉と睫に羽を付けた優男が、倒れた男達の中心にしゃがみ込む。

「靈圧の名残がある」

つい、と指で地面をなぞる。ゆっくりと顔を上げ、目は静かに森の方を見据える。

「虚か？」

「さあね。どのみち一度戻るよ。もし技術開発局の言つた事が本当なら僕達では手に負えないからね」

「追わねえのかよ！ つまらねえ！」

「ほんと、偵察なら他の隊に行かせればいいのにな！」

優男は立ち上がり、今だ氣を失くした男の頭を思い切り蹴り上げた。

「しかもこいつら……全つ然美しくないし！ 僕の前でよくそんな醜い姿を曝せるよな！」

「その辺にしどけ、凹睦」

ガスガスと頭を蹴り続ける優男、綾瀬川弓睦に疲弊する。

あやせがわ ゆみちか

「止めるな、一角！ 白目で倒れるなんて僕を冒涜してやる！」

「いいから行こうぜ。そんな奴等見る必要ねえだろ」

「…………それもそうだね」

些か不満げではあるが、弓睦は渋々ながら頷いた。

坊主頭の男、もとい斑目まだらめ一角は切れ長の目を細め不敵に笑む。

「しかし……中級アジョーカス、最大で最上並ウバーストローデたあ最高じゃねえか」

まるで獲物を見付けた獣のような。

まだ見ぬ相手に心を躍らす。

期待を胸に抱きながら、一人の死神はその場を去った。

北流魂街八十地区“更木”。

偶然か必然か、迷える魂が行き着いた先は最も血で濡れ狂氣の渦巻く魂魄の村。

ペジ、

また一つ、歯車は逆に回る。

延々と続く真っ白な砂漠。

風も太陽もなく、暗い空は虚無をそのまま映し出したよう。

ヒトが考える“地獄”とも違う。だが生きているものにとっては寂寥と孤独を感じずにはいられない。

死んだ世界。そういう意味では、此処、“虚圈”はヒトにとっての地獄とさう変わらないのかもしれない。

「……夏梨ちゃん、何処かなあ

そう呟く織姫の顔は優れない。石田は平常と変わらず冷静な面持ちで口を開く。

「むやみに捜してもきりがない。一度虚夜宮ラス・ノーチエスに行つてみよう。手掛かりはあるかもしねー」

「わしは初めて来たからのう、案内を頼むぞ」

昨日まで黒猫の姿であった夜一は、今は人間の姿だ。

四楓院夜一。
しほういん よよいち。

かつて隠密機動総司令官及び同第一分隊『刑軍』軍団長であり、四大貴族のうちの四楓院家の十一代目当主。“瞬神”の異名を持つ彼女の速さについて来られる者はいない。

褐色の肌に、猫時同様、黒々とした艶のある髪を後ろに結わえている。

身にぴったりとした衣服は動き易を重視の為だらうか。

「…………」

夜一の言葉に、石田は黙りこくれた。そして鋭い瞳を茶渡に向ける。

茶渡の目は穏やかに何処か遠くを見据えている。石田達と目を合わせようとしない。

石田は眼鏡を上げた。

「生憎だが、僕も茶渡も虚夜宮の位置を知らない。それに此処が何処なのかも分からぬ」

虚夜宮は巨大だ。それは距離感を失わせるほど。

姿は見えど、なかなか辿り着くことは出来ない。前回、茶渡と石田はそれを嫌というほど経験した。

それが、今回はその巨大な建造物の先すら見えない。羅針盤なしに大海へ出ると同様、完全に遭難した状態だ。

夜一は欠伸をする。

「喜助も使えるの?。場所を固定すれば良いものを」

「それじゃあ私達、迷子なの?」

「……そういう事になる」

茶渡が呟くように肯定した時、すぐ近くで轟音が鳴り響いた。

巻き上がる砂塵。地響き。

「やあ……」

「虚かの?……?」

構えた夜一に対し、砂煙の中から小さな影が蠢く。

「どわあああああああーーー！」

「シユシユシユシユシユシユ」

「あばばばばばばばば」

小さな身体を追う一いつの影に、鰐のよつたな巨体の虚。

その姿を確認した織姫は顔を綻ばせた。

「あー ネルちゃんだ！」

「何だ、破面ではないのか？」

「破面なんだけどね……」

夜一の問いに曖昧に答えるながら、一いちらへ向かって走る影に大声で呼び掛ける。

「ネルちゃんあああん！」

「な！ そのぐらますな身体は織姫じやないっスかー！？」

翠の髪を揺らせ、意外な人物に会つたと嬉しそうに微笑む。

頭部を覆つた髑髏の、落ち窪んだ目がきらりと光つた。

“超加速”！

飛び付かんと跳んだ身体は直線を描き、織姫の隣に立つていた石田の胴へと吸い込まれる。

「な、」

「そ、その洗剤のような白切れまさか…」

更にその後に続き、白蟻のようなクワガタのような仮面を付けた破面が、後ろへ飛ばされた石田に突進する。

「あばばばばばばば」

最後に、咆哮しながら上に飛び上がった破面が押し潰した。

「ちよ、先が当たつてる当たつてるー。」

地面に這いつぶばつた白蟻のよつな破面、ペッシュ・ガティーシュは叫んだ。

滅却師特有の武器、銀嶺孤雀の先端が僅かに触れている。

「『』を退きたまえ！ 私と貴様はかつての仲間だろ、一護ー。」

「雨竜だ！ 何故毎度まちがえるんだ！」

「何イ！？ そ、それでは一護とはいつたい……」

「それはオレンジのつんつん頭だと言つてるだりつー。君の頭の中は蟻並に小さいのかー！？」

「失敬な！ 私はクワガタだぞ！」

折り合いのつかない言い合いを微笑ましく眺める織姫。彼女の腕の中にはネル・トウが抱かれている。

「ほづ、なかなか興味深い」

まるで良いネタを見付けたとばかりに、夜一は不敵に笑う。

「そこの白いのー。ペッシェを放すでヤンスー。さもなくばドンド
チャッカ・プレスでー」

「君に至つては仲間だつたこと忘れてるよねー?」

ドンドチャッカ・ビルスタン。二メートルを越える巨体に、その身体を半分は覆つてしまふ仮面。見開いた目をぎょろつかせ、歯を剥き出した口を全開させ、何でも握り潰せそうな手を上下に動かす。

それを制止しつつ、茶渡は破面の三人に、「良ければまた虚夜宮まで送つてもらいたい」と伝える。

以前、織姫を助けに来た際もこの三人が飼う鰻のよつな生き物……
バワバワに乗せてもらつた。

茶渡の提案に、ネル以外の二人顔を強張らせる。

「む、無理だ！ 貴様はあそこの恐ろしさを知らないー！」

「そ、そうでヤンス！ それにあそこに行つても何もないでヤンス
よー?」

夜一の目が不敵に輝いた。

「どのみかで恐れしこのじや？ やこじは向もなこのであります。」

必ず何がある。僅かな手掛かりでも良い。くだらない情報でも、今はよいよつましだ。

「吐け。でもなぐば実験体として酷い目に遭つぞ」

「ネ、ネルたつに向をする気ッスか！？」

「おとなしく吐けば何もせぬわ」

「ネルちゃん、お願ひ！ 私達、今人を捜して……どんな情報も欲しいのー。」

にんまりと笑う夜一にネルの顔が引き攣る。一方でペッシュヒドンチャッカは尋常でない汗を流す。

織姫は別として、夜一に従わなければならぬこと、本能が警鐘を鳴らしていた。

「…………あやこにせ」

「ペッシュヒー、壁つでヤンスかー？」

「ドンドチャッカ、漢には覚悟を決めなければならない時があるのだ。まさに今がその時。このペッシュヒー、一張羅の禪に誓つて言つや

「！」

「御託はいいから早く言えー！」

痺れを切らした石田が先を促す。

ペッシュは不満げに何か言いかけたが、夜一に睨まれ慌ててその先を言つた。

「私達は見てしまったのだ。ザエルアポロをー！」

「アポロ……？」

「誰じや？」

「……破面か？」

「で？」

ザエルアポロ・グラント^{エスパーダ}。十刃のＺ・８に名を連ね、その高い知力とえぐい能力によつて石田は苦戦を強いられた。

だがそれも一年前の話。とある隊長格の死神によつて決着はついた。

今更話に出でられる意味が分からぬ。

「『』で？『』じゃないでヤンスよー！」

素つ気ない態度に憤慨し、目の穴から涙と思われる液体を垂れ流す。見れたものではない。

「一護……まさかあいつがどのようにして負けたか忘れたのか！？」

「君は僕の名前をもう忘れたのかー！？」

言い返しながらもふと思い出す。

ザエルアポロが負けた理由。それは死神が作った薬。

『超人薬』。

剣の達人が稀に相手の動きが止まつて見えるように、薬を投げられた者も同様、相手の動きが遅く見えるようになる。

本来は薄めて使用するはずの薬を、その死神は原液を使つた。

よつてザエルアポロにとっての一瞬は数百年に及ぶ。

「オラ達が見た時にはまだ立っていたんでヤンス！」

「いくら洗剤のようこ、白やこ誇りを持つ貴様でも、あのグロテスクさには勝てまい！」

石田の「めかみが引き攣る。

「……一つ聞こつか。それを見たのはいつだい？」

「え？ えー……ドンドチャッカ、覚えてるか？」

「覚えてないでヤンス」

ぼけっと間抜け面を曝す一人に、石田は溜め息をつき説明した。

「超人薬は感覚神経と知覚神経に作用する。だから数百年と感じる
のは本人だけで、もう靈圧の跡すら遺つていなければ」

「甘いぞ雨竜！ 私達の感覚では数百年が一瞬だ！」

「むしろ駄目じゃないか！」

この一人、石田は心底面倒臭そうな表情だが、案外息が合っている。
もしかして芸人を目指しているのでは、と考えた織姫はきらきらと
目を輝かせる。

「どちらでも良いではないか。さあさと乗せてゆけ

いつの間にやら、バワバワの頭部に乗っていた夜一は楽しげな顔。

破面の二人は渋々兜を脱いだ。

瓦礫と化した虚夜宮。以前の莊厳な姿は見る影もない。

迷いなく何処かへ向かう石田の後にぞろぞろと続く。織姫とネルはバワバワと待たせてある。あまり虚夜宮には近寄せたくないと、ペツシヨとドンドチャツカが言つたからだ。

「心当たりがあるのか？」

茶渡の問いに、石田は「いや、」と返す。

「ただ、以前に見た研究所をもう一度見ておこうと思つて」

頑丈な扉で守られていたザエルアポロの研究所。ザエルアポロは己の従属官を改造していた。浦原の話だと、夏梨を襲つたらしい大虚からは一瞬しか靈圧を感じなかつたとのこと。確かに靈圧感知に長けた石田も感じなかつた。大虚を改造するなど想像すら出来ないが、

可能性としては十分有り得る。

「なんじゃ、つまらぬ所よのう。それにこのよつて離れておつては
捜しにくくて仕方ない」

くあ、と欠伸する様は猫のよう。

あまり織姫達を待たせても、虚に襲われたら危ないと、急ぎ足で記憶
していた場所に向かう。

カツ。

「やあ、随分と懐かしい顔があるね」

振り向いたところにそいつは居た。

Look for a clue. (後書き)

なんか……茶渡が空気になつてる(汗)

みんな口調が難しいです……

なんか話が進んでいるのかいないのか(笑)

次章は一護のターンです。原作に突っ込みますが、都合上ちょっとこち
よこ変わると思います。

誰が行方不明だと、誰が殺されたとか、騒がれるのはほんの一時的で、報道されるのはごく一部で。

「一護、『鉄拳』持つてきた？」

何かが変わるわけでもない。

それでも、彼を取り巻く世界は回っていく。

「やべ、持つてくるの忘れた。明日持つてくる

がさがさと鞄の中を探る指先に何かが触れる。

五角形の、髑髏を模したような柄の板。かつて彼が死神であつた証し。死神代行として渡されたそれは、一年前まで虚探知と“死神化”の役割を担つていたが、死神の力を失つた頃から機能しなくなつた。

今ではただの板切れと同じだ。

それでも手放せないのは、今もまだ諦めきれていないのかもしれない

い。

何も出来ない自分が歯痒い。

「なに、あんたまだそれ持つてたんだ」

ひょい、と身を乗り出し鞄の中を覗く。

「んだよ、悪いかよ」

「別に。何を持つていよがその人の自由だし。でもさ、ホントにいいの？」

このままで。

力を失くしたままで。

「……おまえに関係ないだろ」

痛いところを突かれた。長年の付き合いだけ、彼女は一護を見抜いている。

力を欲したところで戻るはずがない。そんな簡単な事で戻るなら、とうの昔に戻つている。

つつけんどんに言い放てば、彼女の眉間に皺が寄つた。

「それ、次言つたら殴るか？」

“関係ない”。一番言われたくない言葉

小さい頃から共にいた彼女、有沢竜貴にとつて、これほど可立ちは覚える言葉は他にない。

一護の母が亡くなつた当時を知るからこそ、余計にそつ脱つのかもしない。

「あたしは確かに力にはなれないだらうけど、腑抜けたあんたをほつとくほど落ちぶれちゃいないよ。何なら今此処でぶん殴つて目を覚まさせてやろつか」

「あきらかに指を鳴らす竜貴に対し、一護はぼんやりとそれを見た後、

「次の授業サボるわ」と教室を出でていつた。

「……ありや予想以上に重症だわ」

教室のドアを見詰めながら溜め息をつく。そして彼女の親友である織姫の席を見て呟いた。

「また面倒な事に巻き込まれたりして」

「この時は軽い冗談のはずだつた。

「黒崎先輩、来週高校と練習試合があり、指導をして頂きたく……」

深々と頭を下げたのは男子バスケ部の部長。一護は見定めるように目を細める。

「いくらだ

「一万で！」

射抜くような目付きに気が気でない。冷や汗が頬を伝う。

一護は低く唸る。

「条件は“勝てるようにする”こと”だろう。

「人数は十五人。安いな」

「で、では一万五千で」

「割に合わねえ」

「二万一.」

釣り上がる金額。結局、一万五千で一護は妥協した。

引き受けたからには必ず勝たせる。それが成し得なければ金は受け取らない。

「やべー、一護のやつ引き受けちつたぜ！ 一週間暇じゃん！」

“取引”の現場をこいつそり覗いていた浅野啓吾は舌打ちをする。

さまざまな過程を経て黒髪のストレートに落ち着いたその頭は、見事なまでに顔とミスマッチしている。

「一護も大変だね。去年は去年で動き回って、今年は資金集めなんてや」

隣で小島水色が呟いた言葉に啓吾も同意する。

啓吾に水色、そして竜貴。彼等は一護が死神であつたことを知つてゐる。そして何度か命も狙われた。

「……て、どうか、何の資金？」

「ああ。卒業した後のじゃない？」

一年前の真相を知る彼等にとつて、一護が“普通”に戻つたのは嬉しい事ではあつた。自分達の知らないところで、自分達を護る為に傷付いては欲しくない。だからといって、時折ぼうっと空を見上げる彼を見たいとは思つてはいない。

最近はバイトも始め、忙しさにからついた表情を見せることも少なくなつたが、いつでも“見えない何か”を探しているのは知つている。

「なあ、啓吾」

商談を終えた彼が啓吾を呼ぶ。

「おまえさ、死神とか虚とか見えるんだよな？」

「え、まあ……」

「靈圧を感じたりは？」

「何となく、ぼやけた程度には感じるけど……何で？」

切羽詰まつたような一護の顔に戸惑いを隠せない。今までそれらの話は自分から避けていたのに。

「夏梨の靈圧、分かるか?」

「夏梨て妹だよな? 黒い方の」

「どうかしたのか?」

そう聞えば、「いや……」と歯切れを悪くする。

「家出?」

「そんなんじゃねえ」

水色が聞いても答えよつとしない。

誰にでも言いたくない」との「いや」一つはある。家庭の事情なんて以つての外。だが二人は直感で“あちら”の関係だと分かった。

一護は困った事があつても胸の内に仕舞つて明かそうとしない。特に靈的なものについては。

だから彼等が死神や虚について知つたのは一護が死神になつて随分

経つてからだし、教えてもらつたのではなく跡をつけて探つたから。

それまで、頻繁に見るよつになつた黒い着物の者や彼等が戦つてゐる白い化け物が何なのか知らなかつた。

「ふうん」

そういうところが、無性にもどかしかつたり。

「ま、何か見つけたら連絡するつてことで。やあやあ帰るつ

それでも追及はしない。教えてくれないなら自分で答えを見付ける。それが水色のやり方。

悪いな、と申し訳なさそうに謝る一護と不満たらうな啓吾と共に教室を出る。

時計の針は四時半を指していた。

水色、啓吾と別れ、家までの短い距離を歩く。

今日、織姫や石田、茶渡は学校に来ていなかった。

考えられるのは夏梨の件。浦原が捜すと言っていたが、織姫達にも手伝つてもうつっているのだ。うつ。

死神の手は借りられないから。

一護は拳を握る。

悔しくて堪らない。

靈が見えない生活は憧れだつた。安らかな、安穏な生活。だが、妹ですら護れないのなら、そんな生活はいらない。

護らなくてはいけない辛さよりも、護れない辛さは遙かに勝る。

「一護」

「たつや」

家が見えてきたところで、門前に見慣れた人影。

そう言って、竜貴に連れられて来たのは川原だつた。

「一護、ちよつと面貸しな

母を失くした、あの川原。

『ゆめやん』

今だに鮮明に残る記憶。

龍貴は腰に手を当て、感慨深げに溜め息を漏らす。

「あんたの悪いこと」ひだりね

「……何が」

不機嫌に顔をしかめる一護を一警し、川に石を投げ込む。

「一人で背負い込むと」

石は波紋を描き沈んでいった。

「夏梨ちゃんがいなくなつたんだ？」

「……」

一護は答えない。

誰から聞いた、と問い合わせようとも心当たりがありすぎる。

さしづめ啓吾か水色が言ったのだろう。

「虚に襲われたんだってね」

「お、これは水色か。啓吾はそれほど鋭くない。

「何で教えてくれないのさ。あたし達ってそんなに頼りない？」

「そりではない。巻き込みたくないだけ。いつぞやのよつて、殺されかけるなんて事が起きてほしくないだけ。ただ、それだけ。

もともと靈や虚が見えなかつた竜貴達が死神まで見えるようになつたのは、一護自身の高い靈力と死神化が原因だ。それさえなければ敵に目を付けられる」ともなかつた。

だから、これ以上巻き込むわけにはいかない。

「これは俺の問題だから、おまえひこは関係ないんだよ

嗚呼、殴られるな。

そう思つた次の瞬間、鈍い音と共に竜貴の拳は的確に一護の頬を捕らえた。

「ふざけんな……」

怒りに満ちた顔。こんな顔をさせるのは一年ぶりか、などと考えている間に彼女は詰め寄り胸倉を掴み上げる。

「あんたのそういうことがむかつくんだよー！ あたしらには関係ないだあ！？ ふざけてんのー！？」

「……ふざけてねえよ」

「ふざけてんだろー！ あんたは関係なかつた織姫を巻き込んだ。あたしだつて巻き込まれる権利はあるー！」

「莫迦言つてんじゃねえ！ 権利とか、そういう問題じゃねえんだよー！」

「莫迦言つてんのはあんたでしょ！？ 巣き込まれたのは織姫だけじゃない、夏梨ちゃんだつてそつよ！ それにあんただつてー」

『今回の事は、全部藍染て奴が原因だつたんだ』

語られる真相。それは彼が掌で躍らされたという事実。

「あんただつて巻き込まれたんじゃないの！！」

この世に生まれ落ちたその瞬間から、彼の運命は道を外れた。偶然重なったように思えた出来事も全て必然。

憐れな、悲しい事実。

「力がないくせに意氣がつてさ……莫迦じゃないの」

俯いた顔は見えない。

彼女にとつて、一護は只の仲間でも友達でもない。言葉では言い表せないような、どちらかといえば兄弟に近い関係。

だからこそ、水色や啓吾が踏み入れない一歩を踏み入れる。

「あたしも手伝うからさ、変に遠慮しないでよ。人数は多い方がいいに決まってるんだから」

「ふつ毛うりぱつに呴いたその言葉は、確かに一護の耳に届いた。

* * *

「どうだった？ 彼は

薄暗い、マンションの一室。

仄かに照らされた影。来訪者はその影に向かって不敵に微笑む。

「いいんじゃねえの？ 奴はいま力を求めてる。俺らひとつでもち
ようびいい

そうか、と紅茶を口に含みながら本をめくる。

そしてパタンと閉じると立ち上がった。

「それじゃあ、そろそろ始めよつか

「おかえり、お兄ちゃん！」

竜貴と別れ、家に帰つた一護を遊子が迎える。

味噌汁の匂いが鼻孔を擦つた。

「夏梨ちゃんいいなあ！ ジン太君や雨ちゃんと一緒に祓いの修業でしょ？ 岩手なんて行つたことないのに。一緒にきたかったなあ」

いつも一緒にいたから、一人きりになるのに寂しさを感じるのかもしない。

もううん、修業に岩手へ向かつたといつのは嘘だ。いかにして遊子を心配せないか、浦原と相談した結果。

案の定、微塵の疑いも持たずにその話を信じた。

罪悪感を煽る。

「遊子、悪い。夕飯いいや

そういう気分ではない。

心配そうに顔を歪めた遊子が何か言つ前にそそくさと浴室へ籠つた。乱暴にベッドへ身を投げだし、ぼんやりと天井を見上げる。

どうすればいい？

答えの出ない自問自答。ぐるぐると混濁する頭の中に、微かに救急車の音が響いた。

一護は不快に鳴り続ける耳障りな音に耳を覚ました。それが携帯の着信音と分かるとすぐに電話に出る。

外は真っ暗だった。夜中とも言える遅い時間に誰だろ？ が、そう疑問に感じた彼の耳に飛び込んできたのは、学校を休んでいた織姫の声。

彼女の言葉を聞いた瞬間、一護の頭の中は真っ白になつた。

「すぐに向かひつー。」

その一言で電話を切り、パーカーを羽織りながら階段を駆け降りる。

「お兄ちゃん……ー?」

驚いた声を出す遊子に答える暇もなく、一護は家を飛び出した。

向かう先は空座総合病院。

面会時間はとうに過ぎてこるので入れたのは院長の計らいだらう。電話越しで聞いた番号の部屋へ向かう。

「黒崎君ー」

「井上、チャド。石田……」

学校に来ていなかつた三人が此処にいる。カーテン越しに映る影が舌打ちをした。

「よつよつて黒崎を呼んだのか」

「へへん。知らせておいた方がいいかなつて」

「おこ……何があつたんだ」

何故、雨竜が病院に運ばれ、田の前で横たわっているのか。一護に

一つの不安が過ぎる。

「言つておくが、君の妹の捜索中に傷を負つたわけじゃない。僕の不注意だ」

そう言われても納得しきれず、顔を歪める気配を感じ取つたのか雨竜は更に続けた。

「報告だ。君の妹を襲つたのは只の大虚じやない」

「……どういう事だ」

「生憎、詳しい事は分からなかつたんだが。一つ言えるのは、その大虚が襲うのは人間だけじゃない。今、虚圏でも無差別に虚が喰われているらしい」

虚が虚を喰らう。それは己の欲を埋めるため。

愚鈍とも呼ばれる大虚が他の虚を喰らうといつのは、即ちその大虚に意思があるということ。

稀に見る、破面の始まりだ。

だが雨竜はその考えを否定した。

「どうやら、そうでもないみたいだ。アレはもともと実験体で、一ヶ円ほど前に盗まれた……逃がされた、と言った方が適切か」

「実験体……逃がされた？ ちょっと待てよ、いったい誰から聞いたんだ！？」

まるで実験の関係者のような口振り。いつたい何処からそのような情報を掴んだのか。

声を荒げる一護に、織姫は口を開けかけ再び閉じる。

言つべきか迷つている。今、言つていい事なのか。

「静かにしたまえ。此処は病院だ」

静かに部屋に入ってきた院長、竜弦に嗜められ、渋々と閉口する。

「黒崎、もう帰つてくれないか。少し疲れた」

仮にこのまま居座り、雨竜に問い合わせたとして、自分に何が出来るだろ？

悔しい。悔しくて、力のない自分を呪う。

「……明日、また来る」

また来てビリする。おまえには何も出来ないだろ。

そんな声が聞こえた気がした。

* * *

一転して静かになつた部屋の中、口チ口チと時計が針を進める。

「石田君、その傷、誰にやられたの？」

虚闊から戻つた彼等は、浦原に一通り説明した後、その場で解散した。一護への報告は雨竜が行くはずだった。

「分からぬ。僕としたことが、完全に油断していた」

カーテン越しにやつ言葉を噛み締める。

“分からない”。

それ以上聞くな、と含んだように言つ。織姫は肩を竦めた。己の力で傷を治すことなど造作ない。だが、それさえも拒否されでは為す術もない。

茶渡は黙つて様子を見ていたが、断固として「分からない」「帰つてくれ」と崩さない雨竜の言葉に従つた。

雨竜は頭が切れる。自分では分からぬ何かに気付いての言葉だろう。

織姫と、彼女を連れ部屋を出て行く茶渡に雨竜は呟くように言つた。

「油断するな。奴らの力は虚に近い。気を付け」

我無沙羅に走つた。それでもやはり頭の中は混沌としていて。

不安や自責が蟠り、叫びそうになる衝動を必死に押さえ込む。

せめて、靈圧だけでも探れたら

氣付かないうちに、夏梨が襲われたと言っていた場所にいた。

灰色の道路にこびりついた僅かな血痕。夏梨の血。

(一護。)

不意に呼ばれた氣がして、はつと顔を上げれば電柱の影に懐かしい母の姿を見た氣がした。

何故だらつか、すぐに錯覚だと氣付いたが、身体が小さく震えていた。

「黒崎一護……か？」

背後から掛けられた声に振り返る。錯覚ではない、立っていたのは大柄の男。見覚えはない。

誰だ、と問う前に、髪を後ろへ流したその男が口を開いた。

「話がしたい。おまえにとつて重要な話だ」

「……誰だよ、あんた」

突然のこと警戒心を剥き出した。何より名前を知られている

とこりう事に一抹の不安を覚える。

「そう警戒するな。俺はあんたに協力したいんだ」

「……」

「死神の力、取り戻したくねえか？」

ヒュッと息が鳴った。一護にとつては又とない話。だが同時に警戒も強まる。

何故、この男が己の名前を知っているのか。
何故、死神であつた事を知つていてるのか。
何故、協力してくれるのか。
何故、このタイミングなのか。

「俺達は完現術フルブリングという力を使う能力者だ。黒崎一護、あんたに頼みがある」

完現術。全く聞いたことのない言葉。

“俺達”と言つ込りから集団であることに間違いはないだろうが得体の知れない。

「こ」の力を貰つてほしい

「……どういう事だ」

「おまえは今狙われている。元は俺達の仲間だった奴にだ」

「俺が狙われてる……？ 何で俺が狙われなきゃならねえんだ」

話の筋が見えてこない。以前のように莫大な靈力を垂れ流しにしていたなら何となくは分かる。だが今はその欠片すらないというのに。

「だいたい俺は死神の力を完璧に失つ」

「失つてはいなさい」

男の胸元で、十字架を模したアクセサリーが跳ねる。

「僅かにだが、確かにおまえな中にある。眠りについただけだ」

信じられない話だった。完全に消滅したと思っていた。もう、戻れないと諦めかけていた。

“もしも力が戻るのなら”

ただの絵空事でしかなかつた。

白黒に見えた世界が彩られていく。

「あなたの名前は……？」

信じていいのか。期待していいのか。

「銀城空吾だ」

「よこしょりと」

浦原は暗い部屋に匣のよつた、巨大な装置を置いた。それを見て、

猫の姿の夜一は退屈そうに欠伸を繰り返す。

「よひやくか」

「ええ、まだ調整は必要ですが

ぽんぽんと軽く叩き、俄かに笑つた。

暗闇の中で、夜一の黄色い目が煌めく。

「長かつたの?」

「そう。でもこれでやっと……」

満足げに微笑みを浮かべる浦原に、夜一は尻尾をはたはたと揺らし、
匣の上に飛び乗つた。

「あやつと話をつけたのか?」

「はい。早くて明日、遅くても二日後には始められまスね

深く帽子をかぶり直す。すると彼の月色の瞳が隣の部屋へ移つた。

そこには見えるのは依然として布団に横たえた、からっぽの夏梨の身体。

襟元がじわじわと朱に染まつていいく。

「 まざい……！ 鉄裁！」

張り上げた声に奥から現れた厳つい筋肉隆々な大男。

「 鉄裁、すぐに彼女の治療を！ 終わつたらすぐに結界を張つてください！」

「 承知しました！」

ダラダラと垂れる血に布団が汚れていく。

浦原は眉を潜めた。

夏梨の身体と魂魄は完全に離れてしまつてゐる。因果の鎖も見受けられない。

だが、本体の方から流血したということは魂魄も傷付いたと考えて間違はないはず。

「 大虚……藍染の実験体……」

靈圧の非探知。生体からの魂魄の離脱。

何かが引っ掛かる。何かを見落としている気がする。

重大な何かを。

「夜一サン。明日に彼等を連れて来てもらつてもいいっスか」

夜一は二つ返事を返し、すつと消えた。

彼等は知らない。

運命とは、神とは、常に残酷なのだ。

You don't know that the fate is always

ぐだぐだで申し訳ないです……

なかなか思うように進まない……

次はちょいひとつ一譲出したら夏梨ちゃんのターンになると感ります。

死神さん達の口調が不安です（（。 。 ； ））

あ、育美さん出すの忘れた。

黒い色調の部屋。窓はなく、その上少ない照明によって部屋の中は薄暗い。

「座れよ」

席へ促した銀城に対し、一護は扉の前で立ち尽くしたまま。

「俺は遊びにきたんじゃねえんだ。早く説明しろよ」

まだこの男を信用はしていない。疑問がありすぎる。

それでも机について来たのは僅かでもいい、希望を見出だしたいから。

「そう焦るな。沓沢、何か飲み物を

そう言われば、カウンターにいるバトラーのような男がグラスに飲み物を注ぎ、テーブルの上に置く。

彼も仲間だろうか、と頭を巡らせていると銀城は話始めた。

「さつきも言つた通り、俺達は完現術を使つ。そこにいる沓沢、ジヤツキー、雪緒……あと此処にはいないがリル力も仲間だ」

完現術。それはいったい何なのか。

見てろ、と言つた後、銀城はグラスに手を翳した。グラスの中で小さな光がチカチカと瞬く。

表面に波紋が出来たと思えば、液体は固体のように形作り、そのまま銀城の口の中へ吸い込まれていった。

「今のは……」

「“グラスの中の酒”の“魂”を引き出し使役したんだ」

ガラン、と飲む物がなくなつたグラスの中で氷が音を立てる。

「俺達の能力は“物質”に宿る“魂”を引き出して使役することだ」

銀城は首に掛けている十字架のネックレスに触れる。

「そして、愛着が強ければ強いほど、形を変える事だつて出来る」

次の瞬間、十字架だつたそれは巨大な大剣に変わつた。

刃先が床に突き刺さり、それが玩具でないことがよく分かる。

「あんたらは……人間か……？」

愕然とする一護に、銀城は笑つた。

「人間だ。だが“ただの”人間じゃない。俺達の共通点は、親親が虚に襲われたこと」

大剣は光を放ち、再び小さな十字架に戻る。

銀城から返つてきた答えは予想外の言葉だつた。

「この能力は虚の力の痕跡だ。俺達は生まれながらにして普通の人間じゃなかつた」

それは、死神と人間の力を併せ持つた一護と相反する存在。

そして織姫や茶渡と同じ。

「……それと死神の力、どう関係するんだ」

「完現術は、俺達と真逆の人間になら力の譲渡が出来る。おまえみたいな、死神と人間の力を持つている奴だ。だが、その為にはおまえ自身の完現術を使えるようにしなきやならない。完現術を完成させれば、おまえの中の眠つた靈圧を刺激し覚醒させられるはずだ」

静かな色を燈した目は、しかと一護を見据える。

はたして可能なのだろうか。

だが、かつては一護も虚の力を持つていた。不可能とは断言できない。

もしそれが本当なら、また皆を護れるのだろうか。

夏梨を助けることが出来るのだろうか。

「前置きが長くなっちゃったな。ここからが本題だ。理解できるのか？」

「ああ……」

一護は扉から離れ、銀城の向かい側に座る。

「おまえを狙っている奴がいる。いや、正確に言えばおまえの中に潜在している完現術をだ。名前は月島秀九郎。かつて俺達のリーダーだった」

「何で俺が狙われなきゃならない。まだその完現術すら持っていないんだぞ」

「おまえの力が強大だからだ。それしか考えられねえ。奴に何か策があるのか知らねえが、じゃなきゃおまえの仲間を襲つたりはしねえだろ」

目を見開く。

彼は今、何と言つた？

「そいつが、石田を襲つたってのか！？」

雨竜は、襲われたのは関係ないと言つていた。

とんでもない。関係ないどころか、自分のせいで傷付いたのだ。

「落ち着けよ。敵を知つてはいる以上、打つ手はたくさんある

「落ち着けるかよ！！ 僕のせいで仲間が傷付いたんだぞ…！」

激昂する一護とは裏腹に、銀城は酷く落ち着いていた。

「だから、月島を越える力を手に入れるんだ。死神の力におまえの完現術、それに俺達のを譲渡できれば月島に対抗できる」

その時、勢いよく扉が開いた。

「連れてきたわ！ ていうか何であたしが行かされたわけ！？ えらつそうに寬いでんじやないわよ！」

そこから入ってきた少女は長いツインテールを揺らし、きつい田元をさらに吊り上げ銀城を睨む。

高い声で叫ぶ彼女を見て、それから視線を背後に移す。

「井上…… チヤド……！」

「おまえの仲間が狙われるって分かったんだ。勝手ながら連れて來させてしまった」

「一護、これはいったい……」

茶渡も井上も戸惑いを隠せない。

銀城は立ち上がった。

「黒崎一護、おまえの返事を聞きたい」

「俺は」

＊＊＊

薄暗い洞窟の中で朝を迎える。

地面が固いせいか、身体はガチガチに固まっていた。

夏梨は傍らに置いてある刀を見ると眉間に皺を寄せる。

はたして、こんな形だつただろうか。

鈍色に光る大刀。曖昧な記憶を手繰り寄せるが、違つたような氣もするし、このようだつた氣もする。

どのみち使えないわけではない。ただ大きさ的に支障は出るかもしないが。

「 の……は……」

洞窟の外から微かに声が聞こえてきた。それから複数の足音。

昨日の事もあつてか思わず身を固くし、身の丈ほどの大刀を構える。予想外に軽かつた。軽い、といつよつむしろ重を感じない。だが、こんな狭い洞窟の中では振ることも出来ない。

外からの光に、刀は虹色に反射する。

「 ！」の辺りから感じるんだが……」

「 阿散井君。この洞窟……」

足音がぴたりと止まる。夏梨の額から汗が落ちる。

「 ！」の中からか

確實に見付かる。見付かったらどうなるのだろう。

洞窟の前からペコペコと肌に感じる、大きな一つの気配。やじて新たに一つ加わる。

「恋次、見付けたか」

「一角さん。恐らくこの中に」

じつと洞窟の入口を見据える。緊張で手が汗ばむ。

ほとんど見付かったも同然、無駄な足掻きはしないで大人しく出で
いつた方がいいのかもしれない。

それでも一歩が踏み出せないのは、昨日の男達が脳裏を掠めるから。

「おーい、中に居るんだろ。痛い目見たくなかったら出てこいや」

「いや、虚相手にんな事言つても仕方ないでしょ……」

どうしたらしいのだろ？。ぐるぐる思考を巡らすが、ろくな案が見
付からない。

夏梨はそろりと洞窟から出た。

穴の前に立っていた赤髪の男が目を丸くする。

「は……餓鬼……？」

彼だけではない。その隣にいた金髪の男も、他一人も同様だった。

「出てきたよ。で、逃がしてくれるの？」

「勝ち気な田。一方で逃がしてくれない場合を想定し、逃げ道を確認する。

「あ、ああ……いや、そういうわけには……」

「その刀は君の？」

金髪の、やるせない顔の男にそう尋ねられ、首を横に振る。

「拾った。というより奪った」

「君……凄い」とするね

黒髪の、綾瀬川の親は瞠目する。

一角は面白そうに笑った。

「にしても、おまえ人間だよな？ なんで現世の服を着ている？」

タンクトップ姿の夏梨を赤髪

阿散井恋次が訝しげに見る。

夏梨は肩を竦めた。自分でも分からぬのに答へよつがない。ただ、今じるこの世界が兄と同じ死神の世界であることにほんの少しの安堵を覚える。

「あたしもよく分からぬんだ。いきなり化け物が」

その時、ズンと空氣がのしかかった。

この重圧には身に覚えがある。いつの間にか塞がりかかつた疵に触れる。

「おい、どうした

いきなり黙り込んだ夏梨に対し、彼等は怪訝な顔付き。

「どうしたって……これ、感じないのー？」

(「とにかく息苦しいのー」)

刀を持つ手が震える。

オオオオオオオオオオオオ！

地の底から轟くような声が空気を貫く。しかし、依然として彼等に気付いた様子はない。

「 ツ、後ろ！…」

奇怪な面の大虚は、その巨体を現した。

「ああ？ 何もいねえじゃねえか」

見えていない。聞こえていない。彼等は大虚の存在すら認識していない。

どうということだ、と自問する。以前に死神姿の兄を見た時はあのような化け物を斬っていた。一護の仲間で死神である彼等が感知できないなんてないはず。

（夢？ 幻覚？）

そう疑うが、肩に残る疵跡がズクリと疼く。

大虚は大きな口を開く。

考えるよりも身体が動いていた。

「！」の野郎！」

恋次の前に飛び出し、攻撃を刀で受け止める。だが、夏梨の身体は難無くぶつ飛ばされた。

地面に強く打ち付け、痛さに小さく唸る。

「な……！？」

「君、大丈夫！？ 何があつたんだ！？」

金髪の吉良イヅルが駆け寄る。

「莫迦！ 右から来てるよ！」

夏梨の言葉と同時に後ろへ飛び退く。ベーン、と地面が凹んだ。

その間に一角が夏梨を抱き上げる。

「おー、何なんだこれは

「あの白い仮面の化け物だよ。あんたらの専門だろー？ なんでアレが見えないんだよ！！」

「君には見えてるのかい？」

「親の言葉に頷く。

夏梨は顔を険しくした。

「あたし、アレに襲われたんだ。喰われたと思ってたのに、気付いたら此処にいた……赤髪のおっさん、前だ！」

そつと離れた瞬間、吹き飛んだのは夏梨を抱えた一角だった。

一角の腕から離れ、再び打ち付けられた衝撃に息が詰まる。

もつー四、そこには虚がいた。

「いって……なんだあ？」

「もつー四いたんだ……」

唇を噛む。立ち上がり一角のもとへ駆け寄る。

「坊主のおっさん！ 大丈夫か！？」

「当たり前だ。何んなんでくたばるわけないだろ」

頭から血を流しても不敵に笑う。夏梨は小さく息を吐く。

「赤と金パのおっさんも！ あたしが指示出すから固まつて！」

「誰がおっさんだ！」

「お、おっさん……」

「あたしからしたら十分おっさんだつての。ていうか右！」

腕を振り上げ突進してくる虚に対し、恋次は刀を抜く。

「吠えろ、『蛇尾丸』！…」

口上と共に刀の形態が変わる。蛇腹になつた刀身は夏梨の示した方
向へ向かつ。

「おかげば、後ろから来てるよー。」

「くそっ」

舌打ちをし、大虚の攻撃を何とか薙ぎ払う。

夏梨の指示は的確だつた。だが、見えない感じない彼等は手応えのみを頼り、決定打を打てない。

とうとう親が攻撃を喰らつた。

(……無理だ、あたし一人で動かすなんて……)

せめて、彼等にも見えるよつになれば……

「 っ、うあ！－」

「 おい餓鬼！－」

油断していたところに虚の爪が襲ひ。

塞がりかけていた疵がぱつくつと開く。

『夏梨』

声が聞こえた。

完現術の説明はショッちやいました……

漫画見返してみたらかなり長くて……

それと一角つて恋次のこと何て呼んでたつけ?

難しい……

とつあえず、夏梨ちやんを出せてよかったです(、ヽ*)

flower (前書き)

flower

花が咲く

目覚める

『夏梨ちゃん、早く早くー。』

ほとんど消えかかっていた遠い記憶。

お母ちゃんと遊子と一緒に公園を歩いていた時の。

家族が揃っていた時の、唯一の思い出。

今より小さい遊子があたしを引っ張る。

『待って、一兄も』

やつぱり小さいあたしは一兄の手を引く。その後ろからお母さんとヒゲ。

みんな笑つてて、す、じ、く、幸、せ、わ、つ、だ、と思、つた。一兄なんか今と違つて眉間に皺が寄つていないし、何より『眞じやないお母さんの笑顔を見れて嬉しい。

ヒゲはいつもと一緒にだけど。

『わあー、ね花が水に浮いてるー。』

遊子達はそこそこ大きい池を覗いていた。

水面には白い蓮の花。

『ほんとだ。変なの』

素直じゃないな。ホントは可憐こいて思つてたのこね。

『変じやないよー。可憐こいやー。』

ほい、遊子がムシとしてる。あたしさそれでもなんか照れ臭くて、
『変だよ』ってふて腐れる。

一兄がお母さんを連れてきた。

『お母さん、この花があにゃー。』

『これはね、蓮華つづりの。可憐こお花でしょ、うへ。』

お母さんもあたし達と回じよひしあがむ。

『蓮華はね、どんなに汚い水でも、それに染まらず綺麗に咲くの』

その時、池の水が盛り上がった。

洪水みたいに大きな波にのまれる。思わず田をつぶつた。

こんな事はなかつたはずだけど。

口の中に水が入る。ちゅうとせまい氣がある、そういう風つて鬱すい田を開けてみる。相変わらず水の中。

底も水面も見えない。かなり深いのかな。光はすくへ差していくんだ。

『夏梨』

また呼ばれた。後ろを振り返ると何も変わらない、お母さんの姿。

呼びたいけど水の中だから息出来ないし、そもそもあきつくなつてきた。

夢の中だらうけど、呼吸つて出来ないかな？

少し息を吐いて、吸つてみる。口からゴボゴボと泡が出たけどちゃんと呼吸は出来た。試してみるもんだね。

「お母さん」

呼んでみる。お母さんはふんわり笑った。大好きだった笑顔。

『夏梨、呼んで』

え、なに？ 今呼んだじやん。

「お母さん」

もつ一回呼ぶと、小さく首を振った。違うって言われても、他に何て呼べばいいか分からない。

『夏梨、名前を呼んで』

名前……

ちょっと、ていうか、かなり気が引けるよ。それに“真咲”なんて呼んだことないし……

瞬間、頭の中に声が響いた。

これが、お母さんの名前？

どういう意味か全然分からぬけど、優しく笑うお母さんに向かって、その名前を呼んだ。

* * *

「おい、餓鬼！返事しろ……。」

「吉良、まだ治んねえのか！？」

「待つてください、もう少し……。」

氣を失った夏梨に背を向け、必死に攻撃を防ごうとする。

だが気配すら感じられない彼等に防げるわけがなかつた。いたぶるような攻撃に、まだ動くことは出来るが確実に疵は増えていく。

「一角、田の前の砂が動いたよ」

「ああ……」

頬から伝つ血を嘗め取り、己の槍を構える。こんな状況でも笑つていられるのは、彼の喧嘩好きな性格のせいだろう。

背後で夏梨の治療をする吉良の額から汗が落ちる。

ぴくりと夏梨の指が動いた。

それを見て小さく安堵する。

「…………か、い」

微かに聞こえた声に吉良は耳を傾けた。

夏梨の手がしつかりと刀の柄を握る。

「『流水・蓮荷真咲』」

「え、」

膨れ上がる靈圧。水の滴る音と共に波紋が広がる。

思わず田を開じる。だがそれも一瞬の出来事で、次に田を開けると彼等は驚愕した。

まるで水の中にいるような感覚。とは言つても身体はむしろ軽い。

空を仰げば、巨大な蓮の葉が逆さに垂れ、そこから滴る水は波紋をつくる。

そして何より、大虚等が姿を見せていた。

* * *

瀬靈挺の中は騒然としていた。

「隊長！　流魂街の方から……」

「ええ、分かつてますよ」

皆、隊舎から出てきて一つの方角を見据える。

「総隊長……」

「……見事なり」

皆が見つめる方向。そこには巨大な蓮華が咲いていた。

＊＊＊

「なにこれ、どうなつてんの？」

目の前の光景に夏梨は呆然とした。

ふと手元を見る。鈍色だつた大刀は脇挿しの大きさになり、白銀を放つてゐる。

あの、空に浮いてゐる白蓮はなんだらう。首を傾げる。

「……すごいね、君」

吉良はおののいた。

まさかこんな子供が……しかも生きているはずの人間が死神の力を手にしているとは思つていなかつた。

それに

「冗解だよね、これ」

「ばん……？ なにそれ」

わよとんとする夏梨に彼は再び瞪田した。

「おー！ おまえら退け！！ 虚閃^{ハラマ}が来るぞーー！」

恋次が怒鳴る。我に返つて見れば、大虚の口に光が集まつてゐる。

あれはやばい。直感でそう感じ、急いで後退する。

だがそれよりも早く虚閃が放たれた。

その大きさも速さも異常だつた。吉良に抱え込まれた瞬間、目の前
が真つ白になる。

轟音と、強烈な光。それも少しすると徐々に消えていった。

疵一つ負わず、呆氣ない攻撃に夏梨は拍子抜けする。

「おまえら無事かーー?」

「無事、みたいです……」

「ねえ、今のつて何だつたの? ただの不発?」

「いや、ちゃんとした攻撃のはずだけど……どうなつてるんだい? 『ひい』
何が起きてる?」

「の子はいつたい何者だ?」

混乱する頭。それでも虚の攻撃に太刀打ちする。

夏梨はじつと戦つ彼等を見詰めていた。己より巨大な化け物に挑む姿。そこに一護が重なる。

此処でも、あたしは護られるのか。

虚は別として、大虚の敵意は明らかに夏梨に向いている。それを食い止めているのは一角と恋次。

虚へは『親と吉良が応戦している。

むず痒い。

せめて自分の身くらい自分で護れるようになりたい。

『大丈夫』

力一杯握りしめた拳を、傍らに現れた真咲がそつと包み込む。

『夏梨』

虚の面が、獲物を見付けたとばかりに夏梨の方へ向いた。

巨体にそぐわない速さで『親達を振り切り接近する。

『退いてはだめよ。一歩、前へ出るの。大丈夫、此処はあなたの領域だもの』

「うん」

刀を反転させると、白銀の刃が光る。

一步前へ。虚との距離がどんどん縮まる。

何となく、この刀にどうこう力があるのか分かった。

夏梨は勝ち気な黒曜石の瞳で見据え、静かに言靈を発した。

「『反花白蓮』」

刀身が砕け散り、空に浮いていた蓮の薺が一気に花開く。

ベキリ。

虚の身体に、仮面に、輝^{ひび}が入った。夏梨が腕を動かすとその輝は広がる。

虚は腕を伸ばす。掻き爪のついた手が夏梨を引き裂^さいて高く振り上げられる。

「危ない！」

吉良が瞬歩で虚と夏梨の間合^まいに入る。

爪と吉良の刀が交えよつとした時、虚の全身がひび割れ、

「……じゃあね」

粉々に砕けた。

破片も残さず、さりやうと砂のようご形を崩し、それも完全に消える。

信じられなかつた。こんな技は見たこともない。

（斬魄刀の能力にしてもこんな事つて……）

周囲の水が柄に集まり、もとの刀身を形作る様を見て、自分より小さな少女に畏縮する。

「怪我はないかい？」

「ずつと後ろで見てたんだから、怪我なんてしてないよ。それに“どこか疑つような目”で、しかし心配の言葉を吐く」親に夏梨は半眼になつた。

「ずつと後ろで見てたんだから、怪我なんてしてないよ。それに“この中”なら絶対しないし。あんた達もしてないでしょ？」

確かに、と頷いた。どういうわけか、水中にいるような錯覚を起すこの中だと疵一つ負わない。現に虚閃を受けても衝撃すらこなかつた。

見た目よりもずっと大人びた態度。少なからずも好感を覚える。

夏梨の目が大虚を捕えた。

「あいつも……」

そう言つて構え直すと、吉良が慌てて止めた。

「大虚ならあの二人でやれる。それよりも君は休んだ方がいい！」

「だめだよ。あたしが休んだらまた見えなくなる」

大量に靈力を消費するようで、額から尋常でないほど汗が吹き出す。立っているのもままならない様子に、親は呆れた。

「一角達のことなら心配いらないよ。あいつらだつて何も考えないで戦つてるわけじゃない」

「でも、」

「いいから任せなよ。これは本来死神の仕事なんだから」

そこまで言われたら引き下がるしかない。「分かったよ」と不満げに呟く夏梨を見て、ふと微笑む。

夏梨が力を抜くと同時に蓮の花弁が散つていった。水中のような不思議な感覚も薄れていく。

大虚の姿も見えなくなつていいく。

『夏梨、逃げて！』

唐突だつた。

母の声が聞こえた瞬間、右腕の感触を失つ。

「 つあ、 」

喰われた……！

右腕の失くなつたところから勢いよく血が溢れた。

They began to move for him.

「あ、あ、あああ、ああ、あ！－」

激痛を越えた痛み。咄嗟に手で抑えると、やつぱりそこから先はな
くじ。

真っ赤な血が悪戯に手を汚す。

大虚の口からぼんやりやぐらやと生々しい音がする。

刀を取られた！

すぐに吉良が応急処置を始めた。淡い光が噛みちぎられた部分を包
み込む。

夏梨は息を荒げて大虚を睨み据えた。

大虚は空間を割り、ぱっくりと開いた中へ姿を消していく。

「お母さん……お母さん……」

頭の中に響いた声も聞こえない。姿も見えない。近くに感じた確か
な存在も消えた。

「お母さんを返せー返せよー。」

こんなあんまりだ。せつかくまた会えたのに……ー。

そんな夏梨を嘲笑つよつて、大虚は一度振り返り完全に消えた。

それと伴い空間の歪みも閉じる。

この喪失感を味わうのは一 度目だ。瞳が潤みそうになるのを必死に堪える。

泣いてはだめだ、と自分に言い聞かせる。あの時たくさん泣いたんだ。もう泣かないと誓つたんだ。

眉間にぐつと力を込め、唇をきつく噛み締める。その表情はどじとなく一護に似ていた。

出血もおそれまい、疵口を手で触れる。

(ない……)

腕がない。

「……すまねえ」

え、と顔を上げる。

「俺達のミスだ。詫びて収まるような問題じゃねえけど……」

「違う」

彼等のせいではない。自分の力不足が招いた結果だ。

「ただの自業自得だよ」

恋次は何とも言えない顔をした。こんな小さな子供からそんな言葉が出るとは思っていなかつた。

怒るでもなく泣き喚くでもなく、一歩置いて達観した姿勢。

こんな奴が現世人でいるのかとつくづく感嘆した。

「謝んなきやいけないのはあたしの方だよ。あたしのせいで怪我させちゃったし……」

「バーカ、こんな怪我のついた入んねえよ」

「ま、このへりこ十一番隊じゃ日常茶飯事だしね」

とも楽しげに口角を上げる一角と弓親につられて笑う。

立ち上がろうとした夏梨の首に背後から刀が宛てがわれた。

「無駄な抵抗はするな。我々は隠密機動部隊。貴様を捕縛する」

広い一室の中に白い羽織りを身につけた者達。総勢十人がその中を埋めていた。

醸し出す雰囲気はそれぞれ異なるが、威圧感は皆並大抵ではない。

「これより隊主会を開く」

上座に立つ、長い髪を蓄えた老年の男が口火を切る。

山本元柳斎重國。一番隊隊長であり、護挺十三隊を統べる頭。

その歳にそぐわず、炎熱系最強の斬魄刀を持つ彼の右へ出る者はいない。

「もう既に知つておろうが、先刻、第八十地区流魂街“更木”周辺で巨大な靈圧が発生した」

淡々と紡ぐ言葉に耳を傾ける。

元柳斎が「碎蜂」と呼べば、小柄な少女が応じ合図を送る。巨大な扉が開き、全身黒づくめの男一人が子供を連れて入ってきた。

抵抗できないようにと残った片腕を後ろに回されているにも関わらず、深い色の瞳は力強い。

視線が一斉に集中する。

「おぬし、名は」

「夏梨。黒崎夏梨」

子供が、夏梨が答える。その場にいた者全員、息を呑んだ。

“黒崎”と言われて思い付く人物は一人。尸魂界を救い、世界を救つた死神代行。

その者の姓を名乗るのだから反応せずにほいられない。

「はて……死神代行、黒崎一護の血縁者と見て宜しいか」

「……やつぱり、一兄の」と知つてんだ。あたしは妹だよ

ぞわめきたつた。そう言われば、意志の強い目は似ている。

興味深く眺める者、実験台を見付けたかのように笑みを浮かべる者、
獲物を狙つよつて田を光らせる者……

ずくりと背筋が疼く。

「おぬしは何故ひづりへ参つたのだ」

「知らない。変な化け物に襲われて、気付いたらひづりになつた」

じれつたそうに早口で言つ。帰れるのなら早く帰りたい、というのが正直な気持ち。遊子に心配なんてかけたくなかつた。

「ふむ……なんと奇怪な事よ。して、斬魄刀を所持していたと聞いた。正解も得ておると。ちと見せてはくれんか」

恐らく本題は「ひりだつたのだらう。纏つ雰囲気が変わつた。

口調は同じだが、眼光の鋭さが増す。

夏梨は乾いた唇を舐め、「ぐつと唾を飲み下した。

「あの刀ならぬよ。腕と一緒に持つて行かれちやつたから……」

無意識に手が疵口に向かう。腕がないのもショックだが、それ以上に“母”も喰われたと思つと心臓が捻り潰されるよつに辛い。

悔しさに唇を噛む。

元柳斎は静かな瞳を向けた。

「斬魄刀の名は」

「……蓮荷真咲」

「なるほど。では呼び掛けてみよ。斬魄刀はいわば魂の片割れ、切つても切れぬ存在。おぬしに靈圧がある限り呼べば応えるであらう

それは“普通”なら。

“普通”ならそつだが、夏梨のは違う。“普通”ではない。

「あれはあたしの力じゃない！ 使つたのはあたしだけど、それはお母さんが力を貸してくれたから……！ さつきから呼んでも返つてこないし、あれだけ近くに感じたのに今は何も感じない。あたしの中にお母さんはもういないんだ！」

くしゃくしゃに顔を歪めて声を荒げる。しかし我に返ぬと仄めぐく顔を俯かせた。

「だから無理だよ」

震える拳に力を入れる。

悲しみか？

いや、違う。悔しさからだ。

夏梨は強くありたいと願つた。兄のように強くなりたい。一護はもう力を失つてしまつたけど、今まで散々護つてもらつたのだから次は自分が兄を護りたい。

母は力をくれた。一護と同じ、死神の力。母の死後、その姿を幽靈として見ることもなかつたので成仏したのだと思つていたが、何はともあれ、母は形を変えて自分の前に姿を現した。

原因なんて分からぬ。ただ逢えたこと、それに力を貸してくれた

」とが嬉しかつた。

今は何も力のない子供と同じ。

母は自分を護つて消えてしまった。

そんな自分に腹が立つ。

「面白い……非常に興味深いヨー。」

一人の男が喜々として声を上げる。

顔面黒塗りの姿は奇怪。

元柳斎はそれを嗜め、喉の奥で唸つた。

「おぬしには悪かろうが、そのような前例は未だないのう」

「別にどっちでもいいんだけどさ、あたしはいつになつたら帰れるの」

聰い子だ。その場にいる誰もがそう感じた。

黒崎一護の妹を名乗るとはいえ、まだ信じるには値しない。嘘をついているかもしれない。まあ、瞳を見ればそのような事はないと分

かるのだが、何せ『魂界は一度酷い裏切りに遭つてゐる。

「おぬしの身元とその大虚が確認されない限り帰すことは叶わぬ」

「大虚？」

「仮面の化け物のことじや」

「ああ、ふうん」

素つ氣なく返し、ふと黙り込む。どうすれば早く帰れるか考えているのだらう。

「大虚はおいといて、あたしの身元なら浦原さんに聞けば分かるでしょ。あの人も死神なんでしょう？」

「な……！ 貴様、浦原を知つてゐるのか！？」

すかさず食いついたのは碎蜂と名乗る少女。

全身の毛を逆立て威嚇するような勢いに、しかし夏梨はあつけらかんとしている。

「うん。お店に姉とよく行くし」

その途端、傘を被り文物の華やかな着物を羽織つた男が反応した。

「お姉さんもいるのかい？」

意外そうな顔からして、大方一護の姉を想像したのだらう。

「あたしの双子の姉、ね」

似てないけど、と語尾に付け加える。

「姉は……遊子はあたしと違つて心配性だから、なるべく早く帰りたいんだ。そのためなら何でも協力する」

その心配性の姉だが、口裏合わせた浦原と一護の言葉に、当手にいつたと聞く夏梨を羨ましがつていることなんて知らない。

いいなあ、と口ずさみながら手へ送る手紙を書いていることなんて知らない。

「よからず。こちらとしても、おぬしの力を借りたいのでのう」

「あ、ありがとー。」

「ひつ簡単に許しが出るとま。

夏梨は安堵の息をほつと吐き出した。

「現世からの報告だ。準備はほぼ完了、明日には行動に移せると」

夏梨が退出し、再び空気が引き締まる。

“六”と書かれた白い羽織りに、頭に“貴族の証”を身につけた男、朽木白哉が淡々と言つた。

「つむ。ではこちから人員を言い渡す。朽木白哉、阿散井恋次、日番谷冬四郎、更木剣八、斑目一角、朽木ルキア。この者等に現世へ向かつてもらつ。そして駒村左陣、涅マユリ、おぬし等はこれからすぐには黒崎夏梨と虚闇へ向かつのじや」

そこはドールハウスの中。作り物の可愛らしさの中で、子豚の人形がトシン、トシンと動く。

「おっ、避けるの上手くなつてきてんじやないの」

その中を覗いていた毒ヶ峰リルカは皮肉げに口を叩く。

「うぬせえよ！－ 眺めてねえでヒントぐらこよこせよ－－」

それに向かつてがなるのは有り得ないほどに身体が小さくなつた一護。こうなつたのも彼女の完現術のせいなのだが、それにしても子豚が巨大な大豚になつたリーチの差につくづく嘆息する。

『ドールハウス』は、彼女が認めて“許可”を与えたモノを、好きなモノに自在に出し入れする能力。

その証拠に、一護の上着には可愛らしい“ハートのマーク”が着いている。

「サテライト」

リルカは思いきり顔をしかめた。

ありえない、といった表情で

「あたしら生まれた時から完現術を使えたのよ！　コツもヒントも
知るわけないでしょ！」

バツ力じゃないの！

そう煽れば、一護の額に血管が浮く。

これも一護の完現術を引き出すための修業の一貫なのだが、こんないい加減なのは初めてだつた。

単にリルカの性格が反映しただけだが。

豚の人形、通称“ブタ肉さん”に入れられたヤクザが怒鳴りながら一護を追いかける。

「ワシはおまえを十五分以内にブチ殺さんと、一生この変な縫いぐ

るみから出でられへんようになんねんぞ…… セやからブチ殺せら
やあああーー！」

「「うおおおおおおーー?」

大きな腕で潰されまいと逃げる。

『完現術は愛の能力』

リルカの言葉を頭の中で反芻する。

完現術を扱えるようになると、そういうモノが必要。

リルカのように惚れ込んでいなくともいい。銀城のように身につけて愛着があるものでも構わない。

いつも持ち歩いているもの……

彼の目がズボンの後ろポケットへ向かつ。

（代行証だ……）

死神の証だったソレ。一護の顔に笑みが浮かんだ。

時間です

機械的な音声が鳴る。

条件通り十五分以内の完現術の発現が認められなかつた為、

猛獸モード”が発動します

『タイマー』が発動した。

“

夏梨ちゃんは死神達との御対面です（^ ^）

夏梨ちゃんはなんであんなに可愛いんだ
妹に欲しいくらい以下ry

前回の章題『flower』ですが、じつは一つの意味を掛けました！

一つは『花が咲く』

もう一つは『才能が開花する』

能力で蓮を咲かせたのは花言葉が『削除』だったのと、真咲さんのイメージから。

よつやく進んできたかな？

まだまだ続くのでよろしくお願ひします（^人^）

力チ、力チと時計の針が音を刻む。

浦原は部屋の中央で胡座をかき、じつと時計を見ていた。

不意に立ち上がる。

「夜一サン、『苦勞様つス』

一枚返された畳。その下はぼっかりと穴が空いており、巨大な空間が存在する。

夜一は軽やかな動きで浦原の前に現れた。

その手には幾本かの縄。

「まつたぐじや。わしどと少々て『まつたぞ』

「『』の……ッ、わつと放しやがれ……」

「なんでネルたつもなんすかあああー。」

「酷いでヤンス！ー」

「鬼だ！ 鬼畜だ！－！」

「「うぬせこのつ。 静かにする」ともできんのか。 こいつの奴は文句の一つも言わぬといつのに」

「てめえが殴り倒したんだらうが－！」

水葱色の髪の破面、グリムジョー・ジャガージャックは声を荒げる。目前にいる夜一を殺さんばかりの勢いだが、鬼道で動きを封じられたあげく、縄でぐるぐる勒せられているため叶わない。

夜一は「はて、何のことかのつ」と皿を切り、白皿を剥いて氣絶したザエルアポロに繋がる縄をくいと引く。

「おい、はよ起きぬか」

ネル達は顔を責ざめ後ずさる。いきなりやつて来て、捕まえられて、連れて来られて、もう訳が分からぬ。

夜一の蹴りで無理矢理意識を覚醒させられたザエルアポロは憎々しげに悪態をついた。

時計の針の音が聞こえるくらい静かだったのに、騒がしこじこじの上ない。

「はーい、眞サソウサウツモーく

パンパンと浦原が手を叩くと一斉に視線が集中した。

「誰だてめえ！？」

「アタシツスか？ アタシはただのしがない駄菓子屋ツス

「駄菓子つてなんすか？」

「あつとお菓子にもならないダメダメな食べ物に違いない！」

「普通のお菓子ツスから」

「お菓子ツスか！？」

「よだれ垂らすな汚ねえ！ つてどわつ！」

お菓子と聞いてぼたぼたと口からよだれを垂らすネルの頭を蹴り上げる。

それを見て逆上したドンドチャツカが頭に食らい付く。

混沌。

「あらー、話が進みませんねえ

「嘉助、のんびりしてられぬぞ。早くせんか」

「そうですね。では、」

浦原は比較的落ち着いているザエルアポロに向き直る。

「アナタのことっスよね。石田サンがあっしゃっていたのは

先日、虚圈から帰つてきた雨竜達からの報告。

それはやはり浦原が予想していた通りだつた。

「藍染の実験体である虚はアナタが管理していたんスよね？」

「ああ、そうだね」

ザエルアポロは至つて興味なさそうに答へる。

浦原は尚も続けた。

「アナタが“生まれた”時の状況を教えてください」

白い、眼鏡の形をした仮面の名残。その奥の目がぎょろっと浦原を見る。

先程とは違い、口許に不敵な笑みを浮かべる。

「あの滅却師、そこまで喋ったのか。まあ良いけどね。話してやるよ」

それは一年前に遡る。

超人薬を投与された後。一人の死神によつて心臓を刀で貫かれ、敗北した。

確かにそれは死んだ筈で。

だが彼は“保険”を掛けていた。もしも本体が死んだら、産み付けた卵が目覚めるようにな。

彼の従属官は、喰えぱたちどころに傷が癒える薬代わりでもあつた。それは一年前の戦いで実証済みだつた。そしてその従属官の役割はもう一つ。

いざといつ時の“母体”になること。

ただしの場合、従属官に産み付けた卵は潜伏期間があるため、実戦で使うよりも成長速度が遅い。

「おかげで外に出らるるまで半年以上かかつてしまつたよ」

話を聞いていた夜一は、うえつと顔をしかめた。

破面の能力は多種多様だが、これほどまでにグロテスクな能力なんか、と身震いする。

「気持ち悪い能力つスねえ」

「僕は完全なのさ。何度もだつて生き返る」

「……それで、その時実験体は……」

「なかつたよ。絶対に見つからぬ場所に保管してあつたんだけどね」

やれやれと溜め息をこぼす。

彼にとつて貴重な実験材料がなくなつたのは重大な問題だつた。

全ては興味の対象。たとえ藍染の所有物であつたとしても。

「アレはなかなか特異だつたからね」

その言葉に浦原の目が鋭く光る。

「どのがスか」

ザエルアポロは笑った。薄情な笑み。明らかに莫迦にした笑い。

「君達に理解できるわけがない。あれは理をも超える存在、特別なんだよ。アレを完成させたらどうなるんだろう。嗚呼、考えただけで鳥肌が立つね」

恍惚とした表情で語る。

理は絶対的、不变なもの。言葉で説明は出来ないし、それを超えるものがあつてはならない。

世界の均衡を保つための理が崩れれば、現世だけじゃない、尸魂界や地獄、虚圈にまで影響を及ぼす。

そんなものを藍染は研究していたのか、と改めて彼の恐ろしさを思い知られる。

「全では終わつとらんといつとか

だが、何故その実験体が夏梨を襲つたのだろうか。

「考えられるとしたら、夏梨サンの靈圧が急速に上がったことくらいですかねえ」

首を捻り呟く。

その時、店の外から声が掛かつた。

＊＊＊

「夏梨ちやーん！」

遊子は一人だつた。暗い、暗い世界、上も下も分からぬ。

ただ、ゆらゆらと灯が燈つては消えていく。

これが夢の中だとは心得てゐる。だが、どうしようもなく不安が襲い。

遠くに、微かに夏梨の姿を見たのだ。

「夏梨ひやーんいないのーー?」

声が弱まる。

遊子はざらりと身を震わせた。

「夏梨ひやーん、お兄ちやーん!」

ゆっくつと歩を進める。止まつてこると不安で押し潰されがちだった。

歩調がだんだん速くなる。

「お父やーん!」

虚無の世界。誰もいない。誰も応えない。

堪え切れなくなり遊子は叫んだ。

「お母やーん!」

はつとして田が覚める。周りを見回せばこいつもと回じ、変わりないリビング。

田尻に溜まつた涙を拭う。

テーブルに突つ伏して眠つてしまつたのだろう。そこには書きかけの手紙があつた。

「あー、早く書かなきゃー。」

右手にいるだらつ夏梨を思つて。

残りをわざりと書き上げ、可愛い兎の模様の封筒に入れると、遊子は家を飛び出した。

「ひんにむけーー！ 浦原さんいますかーー？」

向かつた先は浦原商店。夏梨がいる住所なんて知らないので、浦原に送つてもらおうと考えたのだ。

「浦原さんーー！」

返事がない。首を傾げる。

店は開いているのでないはずはないの」と思ってやうと奥を覗く。

(なんだか……?)

こつもと達つ氣がする

わつ一度呼ぼうとした時、襖がかきつと開いた。

「あらあ、遊子をこじやないスか。今日せびついただい用件で?」

「うさんかま。あの、これ夏梨ちやんに届けてほしこんですー。」

差し出された封筒を一瞥し受け取ると襖に仕舞つた。

「分かりました。ではひかりで送りておきますね」

いつも通りの胡散臭い笑みを浮かべ、帰つとしない遊子に「他に何か」と尋ねる。

遊子は奥をじっと見ていた。

浦原の内心に焦りが生じる。

彼女は妹の夏梨よりも靈力がないと聞いていた。だから整の魂魄さ

えもほんやりとしか見えないこと。

「ここの間まではまあしくそうだった。

黒崎家には珍しい、靈圧の低い子供。

だがいま田の前に立つてこるのはどうだらうか。心なしか靈圧が高くなつてこの氣がする。

「お密せんですか？」

「何故ですか？」

いや、氣ではない。確實に高くなつている。

表情を崩さず、敢えて聞き返す。

遊子は「うーん……」と唸り、首を捻りながら言った。

「なんとなく、いる氣がしたからー。」

それは氣配、つまりは靈圧を感じたといつこと。

浦原は目を丸くした。靈圧を感じるなんてありえないのだ。今、破

面の彼等は殺氣石と同じ効力がある特製の縄で縛られている。

破面を現世に連れてきたなど言語道断、戸魂界に決して知られてはならないから。

だから、あるはずないのだ。

「じゃあまた！ ジン太君と夏梨ちゃんにもよろしく言ひておいでください。」

子供らしい満面の笑顔でそう言い、帰っていく姿に浦原は鋭い視線を送る。

不可解。

あれだけ強い靈圧を放つ兄と妹に挟まれても上がることがなかつた靈圧が、何故、一護の靈圧が消失してから、夏梨が消えてから急激に上がつたのか。

強い靈圧に触発されたなら分かる。しかしそうではない。

あれこれと思考しながら部屋に戻ると、破面達を足で踏み付けおとなしくさせている夜一が声を掛けた。

「どうした、喜助。もしや騒ぎ声が外に洩れておつたのか？」

「いえ、声は全然洩れてなかつたんスけどね」

歯切れの悪い返答に、夜一は眉間に皺を寄せた。

「なら何だと聞ひのじや」

「靈圧を感じたみたいにス」

「靈圧？ 誰のじや」

「Iの入達の」

しばし沈黙が流れる。嘘つけと笑い飛ばしたいところだが、彼がそういった嘘をつかないことは知っている。

それでも夜一は「ありえん……」と漏らす。

「……………のどこのじや？」

「遊子さんですか？」

「一護の妹か……」

「一護……黒崎一護かあ！？」

その名前にグリムジョーが過敏に反応した。

一年前の戦いで負けたあげく情けまで掛けられたのだ。彼にとって恥まぬまじい名前でしかない。

「黒崎はどうだ…… 黒崎を出しゃがれ……」

「ネルたつも一護に会いたいっす！」

今すぐにでも戦闘を始めそうな勢いにネルも便乗する。

「はいはい、では今度会いに行きましょうねえ」

「なめてんのかてめえ……」

「なめてませんて。ではアタシはこれから引きこもるので、アナタ方は勉強部屋で寛いでいてください」

へらへら笑い、問答無用に彼等を畳の六へ落とした。

「てめえ殺す……」と何やら物騒な言葉を受け流しつつ、畳を元に戻す。

「はたして、今日一田でどれだけ出来ますかねえ」

彼の手に握られた小瓶。その中に入っているのは夏梨を襲つた大虚の靈圧。

これが、世界を救う鍵になるのか、はたまた滅亡させる脅威になるのか。誰もまだ知らない。

* * *

天空を仰ぎ見もあるのは暗い空。太陽も月もない。

白い砂は、きっとかつて虚を形成していたものだろ？

夜の世界。

そこに白い蝶のよつた蘭のよつた。

ピシリ、ピシリと真っ白な殻に蝶が入る。

はうはうと崩れた殻は砂地と同化して。

一つ、産声が上がった。

凶悪で、神聖な

「嗚呼……」

早く行かなければ。

愛しい我が子が待つもとへ。

運命は歩き出した。もつ後へ戻ることは出来ない。

なうぢー歩を踏み出せ。

畏れではいけない。

恐怖を捨てろ、前を見る。

進め。決して立ち止まんな。

退けば老いる。臆せば死ぬ

ただ、その名を叫べばいい。

ザエルアポロ……

彼は本当に苦手です。

ネムに卵を産み付けるといひではガチでチキン肌になりました……

勝手な設定盛り込んだしゃつたけどいいよね！問題ない！

そしてお久しぶりな遊子ちゃん。

口調とか分かんなさ過ぎて大変でした。

伏線（？）的なを張つてきているんですが、分かるかなあ？

ていうか伏線になつてゐのかなあ？

読み終わった後、「そういう意味だったのかー」てなるよいつな話に
したいです（^_^）

ハードル高いけど。

どうしたの？ また怖い夢でも見たの？

おいで、一護。

大丈夫よ。お母さんがいれば怖くないから。

お母さんと一緒に安心でしょ？

ほら大丈夫だから。

怖い夢なんて飛んでいけ！

これでも怖い夢は見ないわ。

安心して寝なさい。

でもお母さんから離れちゃダメよ？

白この化けが食べに来ちゃうからね。

「斬月の……鍔……！？」

代行証から洩れる黒々とした氣は、かつての彼の斬魄刀『斬月』の鍔を形作る。

それは彼の誇り。忘れられない記憶。

「これが一護の完現術……」

ようやくだ。ようやく、力を取り戻すことが出来る……

一護は『タイマー』によつて化け物と化した人形を見据えた。

殴り掛かってくるこん棒のような腕を、その鍔で弾く。

斬れてはいない。効能は斬月の鍔と同じ。代行証を手から放しても使えなくなる。

(どうする?)

頭の中は意外にも冷静だった。

感じるのだ。身体が、感覚が取り戻していくのを。

『戦い』の本能。

ドクン。

一瞬だけ、代行証が脈打つたような気がした。

この感覚は知っている。

身体の芯が熱くなる。懐かしい、相棒の……

一護は地を蹴った。化け物が大振りに腕を振り回している隙を狙つて懐に入り込む。

「バカ！ そんな懐に入つたら 」

リルカが止めるが構わず腕で一線を描く。

月牙天衝。

卍は回転しながら円を描き、代行証から放たれる。

それは勢いに乗つて化け物に衝突した。

「…………や…………」

「やつた…………」

一護は代行証を見詰める。

取り戻せるかもしない。またみんなを護れるかもしない。

胸の内から何かが沸き上がるのを感じ、それを強く握りしめた。

光が射した。

＊＊＊

織姫は家路を一人で歩いていた。学校からの帰り道。マンションの階段を軽やかに上がる。

今日、一護は学校に来ていなかつた。茶渡もだ。

(修業を始めるつて言つてたしなあ)

今夜にでも顔を出してみようかな、と鼻歌まじりに考える。

「えーっと、鍵鍵ー……」

一人暮らしの寂れたマンション。家族なんていないも同然の織姫に、叔母から送られてくるお金で毎日やり繰りしている。

彼女の兄は随分前に死んだ。交通事故だつた。

虐待を受ける毎日、そこから一緒に逃げ出したのが兄の異。兄といふよりは親のような存在だつた。

交通事故に遭つた日の朝、初めて一人は喧嘩した。とても些細なこと。誕生日プレゼントに兄から贈られたヘアピンが何故か気に入らなかつた。たつたそれだけ。

謝りたい時に、既にその人はいなかつた。

小さな身体で大きな兄を背負い、小さな自宅営業の病院に向かつたが、助からなかつた。

そのヘアピンはブレザーの襟にいつも着けている。大事な、大切なのだから。

「井上織姫だね……？」

突然、背後から名前を呼ばれた。驚き振り返ると、黒髪で線の細い男が手摺りに腰掛けていた。

いつの間に、と田を見開く。

「あなたは……」

聞かなくとも何となく分かつてはいた。

恐らくこの男が

「月島秀九郎」

一護を狙い、雨竜を斬った本人。

ヘアピンが着いている襟もとに手が向かう。

月島はパタンと本を閉じた。手摺りから下りて織姫に向き直る。

「安心しなよ。君を襲つたりはしない」

そう言いながら本から栄を抜く。チカチカと光を放つた後、それは刀に変わっていた。

「完現術……」

「何が“襲つたりはしない”だ、戦う気満々ではないか。

「もう銀城と会つたのか。行動だけは速いな」

「あなたが石田君を斬つたんですね」

「……」で捕まえなければ、一護が狙われる。

逃がすわけにはいかない。

「なら、何だつて言つんだい？」

「あなたを捕縛します」

両手を前に翳し、言靈を唱える。

兄から貰つたヘアピンは姿を変える。

言つた直後、月島を見失つた。

背後から、生々しく刀で斬られる感触。

肩から斬り込まれ、胸まで押し進められる確かな感触。

「……え……」

「なあなあ、あたし一人で走れるから降ろしてよ

「……」

「なあつてばー！」

「ぬ……耳を引っ張るでない」

「まったく喧しい小娘だネ」

黒腔ガルガンダの中、狛村に背負われている夏梨は彼の犬耳をぐいぐい引っ張る。

それを見て、涅は平常の顔で悪態を吐いている。

「黒腔は靈子を足場にしなければならぬ。貴公には無理である」

そう言わると口をつぐむ。ふて腐れたよつて舌打ちをした。

「まあいいや。狛村さんの耳触れる」

手を伸ばし、ぽんぽんと頭を軽く叩くと耳がひくひく動いた。

この娘は、この姿をどうも思わないのだろうか。純粹な疑問を投げ掛けると、夏梨は「なんで？」と首を傾げた。

「びっくりはしたけど、なんかカツコイイじゃん。癒し系だし、あたし犬好きだし」

「……そつか」

（狼なのだが……）

狛村は微妙な面持ちで頷いた。しかし、そういうひとつひとつはやはり兄と似ているなと感じる。

あの死神代行とそつくりだ。表裏のない性格にほんわかと和む。

だが、夏梨の「どこまでが犬なの?」という質問に思わず唸つた。

「くだらない話はやめたまえ!。それより私の実験体になる気はな
いかネ」

「やだよ」

「涅、いい加減にせぬか」

「何故だネ? 今ならV-E-P待遇してやるところに」

「目がイッてる人に着いて行きたくないし」

「失礼極まりない奴だネ。私の言つことを聞きたまえ!」

そんなやり取りを後ろで聞いている者が一人。

（ひいいい！ こんな空氣いたたまれない！）

「おーい、花太郎。ついて来てるか?」

「は、はい！」

山田花太郎。四番隊の席官。黒髪に眠そうな大きな垂れ目。

夏梨に呼ばれ大袈裟にびくつく。

何故、こんな事になつたのだと思い嘆く。

（卯ノ花隊長おおおーーー）

事の始まりは一時間ほど前。

四番隊隊長、卯ノ花烈が隊主会から戻つてきた時、傍らにこの見知らぬ子供がいた。

『卯ノ花隊長……そちらは……』

死霸装でも、ましてや流魂街で見る着物でもない。

流石に副隊長の虎徹勇音も目を丸くした。

『黒崎さんの妹御だそうですよ』

『一護さんの一!?』

花太郎が驚いているのをよそに、卯ノ花は彼女の疵を癒す。

夏梨は不思議そうに眺めていたが、ふと花太郎の方へ向いた。

『黒崎夏梨。よろしく』

『ぼ、僕は山田花太郎といいます。よろしくお願ひします』

『単純すぎて覚えにくい』

意志の強い瞳はそつくりだつた。ついでに反応も。

花太郎は以前、旅禍として侵入した一護を助けたことがある。治療は腕が立つが戦闘においては全く駄目な彼にとって一護は憧れにも近い存在。

そんな彼の妹と聞いたら、気になるしかないじゃないか。

そわそわと落ち着きなく夏梨を見ている花太郎の様子に、卯ノ花は聖母のように微笑む。

『お一人は何だか似てますね』

黒髪のところとか。

いち早く反論したのは夏梨だった。

『あたし、こんなへたった顔してないよ』

『え、えーーー?』

何だか一護自身に言われたような気がして落ち込む。

そんな彼に、卯ノ花は更にとどめを刺した。

『やつやつ、山田七席、あなたにはこの子と一緒に虚圈へ行つても
らうますわ』

『えーー? なぜ虚圈へ?..』

『こりこりと事情があつまつして。でも夏梨さんはまだ治療が必要な
のですよ』

『で、でも』

『行つてくださいませ?..』

『は、はーいーー』

花太郎は溜め息をつく。

こんな自分が役に立てるのかとも思つたが、出来れば行く前に人選を教えてほしかつた。

狛村はまだしも、涅は氣味が悪くて仕方ない。

いや、まだ十一番隊がいなくて助かつたのだが。

「花太郎、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です！ 僕のことはお気になさりやす！」

「これ以上心配されたら立ち直れないよ……」

ちらりと狛村の背にいる夏梨を見遣る。

まだ小さい子供なのに、片腕がないにも関わらずどうしてあんなにも堂々としていられるのだろう。

やるせない気持ちに溜め息を吐いた。

「どうだ、何か感じるか」

「……微妙」

巨大な建物の残骸を足で蹴りながら首を傾げる。

頼りない返事ではあるが、足はしつかりと一つの方向へ向かっていた。

狛村は絶えず耳を動かし周りに気を配っている。

花太郎も辺りをきょろきょろと見回していた。

「うわあ！－」

突然、夏梨が声を上げた。

急いで向かうが姿が見えない。

「みんな足元気をつけて！ 穴が空いてる！」

下を見ると、なるほど、確かに穴が空いていた。外からこじ開けた
よつな穴。

中を覗くと夏梨が眉間に皺を寄せ見上げている。

「夏梨さん、大丈夫ですか！？」

けつこうな高さがある。足をくじいては大変だと声を掛けるが、意外にも怪我はないようだった。

兄にて頑丈なのか、けろりとしている。

「向こうに何かあるから、あたし見てくる」

夏梨はとんでもない事を言い置き、狛村と花太郎が止める間もなく元気に走つて行ってしまった。

虚に襲われたらどうするのだ、と吠えるも後の祭り。

「儂等も行くぞ！」

「は、はい！」

夏梨を追つて狛村、花太郎も穴に飛び込む。

「まったく面倒な連中だヨ。私はこっちを見に行こうかネ」

涅は一人、どこぞへか姿を消した。

穴の中はそこそこ広かった。ただ明かりが侘しく、薄暗い。何に使うか見当も出来ない不思議な機器。その合間を縫つて進むと夏梨の背中を見つけた。

一つの巨大な硝子の容器。その隣に紙が乱雑に散らばっている。

「これはいつ……？」

良からぬ事をしていたのは見て分かる。

藍染か。

狛村は憎々しげに唸つた。

「夏梨さん……？　どうしました……？」

一枚の紙を凝視したまま動かない。

花太郎が声を掛けると、夏梨の肩が小さく震えた。

「……なんで、ここにヒゲや一兄の名前があんだけよ……」

グシャッと紙を潰す。

「なんで……これじゃあ……」

彼等が、実験体のようだ。

ここで何を研究していたんだ？

何のために、なぜ一護達の名前がある？

この容器の中にいた奴は、どこに行つたんだ？

「くそつ……」

怒りで瞳を滾らせる。

「二人とも、こちらへ来ててくれぬか

奥の方へ行つた狛村に呼ばれ、一人がそちらへ行くと巨大な穴があつた。

先は見えず、ひんやりと冷たい空気が漂っている。

「儂が先に行く。貴公等は後ろについて来い」

泊村が入つていぐ。その後ろを夏梨、花太郎と続く。

壁を破壊して作られた洞窟はつい最近できたらしい。

そこにあの大虚の靈圧を感じた。

「上へ抜けるぞ」

1キロほど歩いただろつか。長い洞窟は終わり、また暗い空を拝む。

地面を見ると、何かを引きずったような跡が見受けられた。

後ろを見る。さつきまでいた虚夜宮。

「……儂から離れるでないぞ」

引きずつた跡はすぐに途絶えた。そこには何もなかつたが、一つだけ、巨大な靈圧の名残があつた。

それは以前戦つた破面達の比ではない。

「急いで戻るぞ！ もしやとんでもない化け物が生まれたやもしれぬ！」

夏梨はその場所をじっと覗詰めていた。

「夏梨さん…？ 早く行きましょう！」

「……うん」

狛村さんは癒しです。

耳をぴくぴくさせたり回復させます。

射場さんも出したかつたけど、
口調が分からんし挫折。

（笑）

それと、花太郎も好きなんだけど、うちが書くと可愛くないですね

それから田舎谷や品川も出したいです（・・）

夏梨達は穴を引き返し戻つてみると、ビジギーか姿を消していた涅がつるついていた。

「ふむ。 じいじはどうやら研究所と繋がつていたようだね」

その辺のものを漁りながらぶつぶつと呟く様子は不気味。

花太郎は顔を引き攣らせた。

「涅、 急いで瀧靈挺へ戻るぞ」

「何故だネ。 私はまだ十分調べておらんぞ」

まるで子供が駄々をこねるよつだ。 少しも可憐くはないが。

「いい加減にせぬか。 早急に手を打たねばならんのかもしれんのだぞ」

「だから何だと呟つのだネ？ 私に描図をするのはやめたまえゾ」

ああ言えばこいつ言つ。終わりの見えない押し問答に、花太郎はただおろおろと右往左往するばかり。

夏梨は黙つてその様子を見ていたが、ふと視界の隅に一冊の古びた本を見つけた。和綴じにされたその本はぼろぼろに汚れ、紙も黄ばんでいる。

それを取り上げるとパラパラとめくる。

筆で書かれたのか、昔の字体に首を捻る。

「ねえ、ここの本なに？」

一人に本を突き出して見せると涅は鼻で笑つた。

「そんなんも知らないのかネ！　まったく、最近の餓鬼は無知で困るやー！」

「涅、少し黙らぬか。それは所謂神話のようなものだ」

「神話？」

「ああ。確かにこの世の理について書いてあつたよ」と思つたが

夏梨の手から取り上げ、さつと手を通す。

「『是、則ち理也』」

「なに？」

「目に見えぬ力のことだ」

それは不变の摂理、人間が神と呼ぶもの。

右手は水極、則ち陰にして身。左手は火足、則ち陽にして靈手を合わせること、それはつまり陰陽の調和、太陽と月の交錯、靈と肉体の一体化であり、火と水が交えれば火水かみとなる。

それが理であり神なのだ。

「……なんか難しい」と言つてゐるね

「つまりは合掌……祈念せよ、されば叶わんと、そういう意味であら」

パタンと本を閉じ夏梨に返す。

夏梨はじつとそれを見詰めた後、不意に顔を上げた。

「続きはないの？」

「あるにはある。だがその話は後だ」

狛村の耳がひくひくと動く。言葉にしなくとも、その場にいる全員が感じ取れた。

虚夜宮に向かってくる無数の靈圧。雑魚のようなものからアジュー力ス級のものまで。

違言はないな、と睨みを利かせると涅は不機嫌に見返したが、最終的には従つた。

虚に襲撃されでは、満足に調べ物も出来ないと践んだのだろう。

行き同様、狛村に背負われ暗い空間を走る。

ぐりぐりした空氣に顔をしかめつつ、夏梨は狛村に話し掛けた。

「ねえ、さつきの続きをよ

「『つむ……儂もさだかではないが。確か続きは』

「『最後の審判』だ」

狛村の言葉を奪い、ぎょりりと瞳を夏梨に向ける。

「『最後の審判』？」

その言葉を口に出すと、何故だか知らないがぞわりと肌が粟立った。

全身が拒否してこようだ。

鳥肌が立った腕を摩りながらその先を待つ。

たが涅はその先を言わなかつた。無言のまま靈子で足場を固める。

何が何だか。花太郎に視線を向けても困つたように肩を竦めるだけ。

「ねえ、『最後の審判』になるどぞうなるんだよ

「何もない」

声は、はつきりと響いた。涅は口角を上げ、今まで無感情に聞こえた声も楽しげに弾む。

「まさに『無』なのだヨ。それが『始まり』なのか『終末』なのか、それすら分からぬ。ただ無に還る」

世界の終わり。相反するもの同士が交じり、解け合い、一つになれば何もなくなる。

一から一を引いて零になるのと同じ。

「たかだか神話だがネ……」

そんな涅の言葉も、夏梨の耳には入つてこなかつた。

黒腔から抜け出た時には、既に空は暗くなつていた。天高く三日月が笑つている。

狛村、涅の二人はそのまま姿を消し、夏梨は花太郎に連れられ再び四番隊隊舎へ赴いた。

「（い）苦勞様です」

そう微笑んで迎え入れてくれる姿に小さく息を吐く。卯ノ花を見ると母と重ねてしまつ。似ているわけではないが、“母”というのはまさしくこの人のことなのだろう、と妙に納得してしまうのだ。

卯ノ花は診断をしていた。黒髪の、肩より上で切り揃えられた頭は後ろから見ると少年にも少女にも見えなくはない。だが華奢な体格から、やはり少女なのだろう。

ふと、その少女が振り返る。

目が合つた瞬間、少女は大きく目を見開いた。

「……夏梨か……！？」

「ルキアちゃんだ。どうしたの？ 怪我？」

飄々とした夏梨に、朽木ルキアは勢いよく卯ノ花に振り返り、ぱくぱくと口を開閉する。混乱しているようで、口から出てくる言葉は吃っている。

卯ノ花は微笑むばかりで何も言わない。ルキアの視線がぎこちなく夏梨に戻り、その腕を見た。

ヒュッと喉が鳴る。

「夏梨……っ、その腕はいつたいどうしたのだ！」

駆け寄った彼女が触れるのは先がなくなり包帯で巻かれた腕。先程とは違った顔の険しさ。

ルキアは現世にいた時、黒崎家に居候していた。もちろん義骸に入り誰にでも見える姿でだったが、その時とは異なる口調に壁田する。

「何故そなたが此処にいるのだ… 一護は知つてあるのか…? いつたい何があった!」

「ちよ、ちよっと待つてよ!」

矢継ぎ早に、ただならぬ氣迫で迫られ夏梨は声を上げた。

ようやくルキアは口を閉じるが、眉間に皺を寄せたまま。

「あたしも全然分からないんだ。一兄はたぶん知らないし、浦原さんもあたしがここにいることは知らないと思つよ。腕はちょっと… 食べられちゃつただけ」

ふう、と息をつく。自分でも今の状況がよく分かっていないのだ。これ以上説明のしようがない。

ちらりとルキアを盗み見る。ルキアは顔を臥せ、細い身体を震わせていた。

「ルキアちゃん…?」

恐る恐る声を掛ける。何かまことに事でも言つただらうか、と思い悩んでいると、ルキアはキッと顔を上げた。

「莫迦者……」

「ン、と頭に小さく衝撃が走る。

「食われただけだと！？ 腕一本、安いとでも思つておるのか！？ まだ年端もいかぬ女子が何を言つておる！ 一護がどんな顔をするかぐら、分かつておらう！？」

拳を驗らつた頭を抑え、驚き見張るが、すぐ逆さまに手を反らした。

嗚呼、

「本当に、そなた達兄弟は……」

無茶をする。

ルキアはせりと頭を撫でる。自分よりも小さい身体。それでもやはり流れの血は一護と同じ。

夏梨は思わず俯く。ルキアの怒りも尤もだと分かっていた。

「……」めん

小さく、小さく呟いた。

その時。

「おひ、ルキア。帰つてきたらしいな」

がらりと戸が開き、現れたのは赤い頭。

恋次は入つてくるなり、どっかりと椅子に座る。

「赤髪のおひさんじやん

「誰がおひさんだ」

夏梨の相変わらずの呼称にぎろりと睨みを利かせる。

「それより、おまえ何で医務室なんかにいるんだ？」

怪訝な顔をする恋次にルキアも首を傾げた。

「いや、現世で虚に襲われてな。その時、背中を斬られた気がしたから診てもらひたのだが何ともなかつた」

「どんな勘違いだよ。ダセバ」

「夏梨、いやつのことは刺青眉毛と呼んで構わぬ」

「分かつた」

「ぐだらねえ」と教えんじやねえよ……」

勢いよく立ち上がり、椅子が転倒する。

そのまま喧嘩でも始めそうな空氣の中、卯ノ花が「阿散井さん」と笑顔で呼べば、途端に静かになり椅子をもとに戻し座り直る。

「……で、おまえ夏梨でいうのか」

「うそ」

「しかし夏梨、そなた背が伸びたか?」

「せりや一年もすれば伸びるよ」

「おこ、ちよつと待て!」

和氣藹々と話し始めた一人に恋次は歯止めを掛ける。

「おまえらいつ知り合つたんだーー？」

その口ぶりはまるで旧知の仲のよくな。

しかし幼なじみである恋次はルキアから夏梨の名を聞いたことはないし、会っているのを見たこともない。

「一年前、家に居候をせてもうつてな」

「おまえが居候した家つて一護のところだら？」

「そうだが？」

はあー？ と、恋次は頭を捻る。その様子を楽しむルキアは悪戯な笑みを浮かべた。

「恋次、夏梨は一護の妹だ」

「い、」

「妹おおおおおーーーー？」

そう叫んだのは恋次ではなく、廊下で話を聞いていた一角。弓親も隣にいたが、こちらはある程度予想はしていたようだ。

それでも驚いてはいるが。

「妹ですか！？」

またあらぬ方向から叫び声が聞こえたと思えば、窓が勢いよく開かれる。

そこから顔を覗かせたのは、艶やかなブロンドの髪に豊満な胸を携えた松本乱菊。

窓から侵入した乱菊は迷わず夏梨を抱きしめた。

「きやあああ！…もうなにこの子、小さいし可愛い！…！」

豊かな胸に顔を押し付けられ、窒息しそうになる彼女の傍らで一角は田をざらつかせている。

「おい夏梨といつたか！？ 今すぐ一護を呼べ！ 久しぶりに勝負だ！！」

「ひょっと何言つてんの…？ これから宴会に決まつてゐじやない
！」

「一角さんも乱菊さんも静かにしてくだわい…」

騒ぎ始めた一人を必死に落ち着かせよつと試みるが、それだけで静かになるはずもなく。

逆にヒートアップしたところへもう一人の訪問者が。

「松本おおおおおー…」

「た、隊長おー…」

銀色の短髪に、翡翠の瞳を滾らせた少年。白い羽織りを着た姿は隊主令で見たばかりだ。

田畠谷冬獅郎は夏梨とほとんど同じ服装にも関わらず、威圧感を放ちながら乱菊を睨み付ける。

「松本お…おまえ、仕事はどうした」

「え、えつとお、ひょっと休憩しようと思つて…」

「……一時間」

「え？」

「おまえが消えてから一時間だー、減給すんぞーーー。」

田畠谷の激昂が飛んだ時、卯ノ花は静かに立ち上がった。

たつたそれだけ。たつたそれだけその場は静まり返る。

「やはり若い子達は元氣ですね」

微笑みを讃えてこるのに、この黒々とした雰囲氣は何だらうか。

「しかし子供とこつのは外で遊ぶのが定石では?」

びしり、と空氣が死んだ。

明かりが燈つては消え、消えては燈つて。

それ以上の変化はない世界で、遊子は田を開く。

（また）の夢……）

流石に一度田となると落ち着きもある。冷静に辺りを見回す。

近くで灯が燈つた時、自分が立っているのが水面だといつことに気が付いた。

しゃがみ込み中を覗く。だが灯は呆氣なく消えてしまった。火花を散らして消えていく様は花のようにも見える。

まるで小さな花火だ。

ふと、その一つに触れてみた。

そんなことすれば熱いに決まっている。そう思つたが、何故かどうしても触つてみたくて。

まったく熱くはなかつた。

温もりを持ったそれは遊子の手が触れるといつそう輝きを増す。

それが合図だつたのだろうか。今まで一つ燈つては消えの繰り返しだつたのが、まるで機が熟したように、辺り一面に数え切れないほどの灯が燈つた。

「わあ……！」

キラキラとまばゆいばかりに光を放つ灯。足場になつてゐる水面に映り、幻想的な世界が広がる。

下を見て、ああそうだ、と納得した。

前に夏梨を見たのは、この水の中だった、と。

遊子は灯の一つを掌に乗せた。そこで初めて気付いた。

灯ではなかつた。

それは金に光る紅の蓮華だつた。

年明けまでに完結させたいけど出来る気がしない……

今回は少し宗教的な要素を入れました。

『最後の審判』とか。

でも本当の（？）『最後の審判』は世の終末に人類が裁かれることです。

キリストが再臨して千年王国の後、死人が復活し、善人は永遠の祝福に、悪人は永遠の刑罰に定められるという……（広辞苑より）

でも死神だし、独自の設定にしました。

仏教的な意味合いで蓮も盛り込んでるし。

次は現世中心になるかもです。

自分の一護の修業はあまり話に入れたくないのですが、そうすると一護のほうが急展開になるので少し入れます。

こんなでも感想を頂ければ幸いです（^ ^）

一日の修業で完現術を発現させた一護は、翌日学校へ行った。案の定、無断欠席したことで担任の越智と竜貴にシバかれた。

その日も特に変わりはなく、夏梨の手掛けりも摑めないまま一日が過ぎていく。

「あ、そうだ。一護、あなたのバイト先の店長、昨日来てたよ」

帰りのホームルームが終わり、鞄に教科書を詰めていた竜貴が思い出したように言った。

「今日も来るって

え、と声を漏らしたその時、教室のドアが勢いよく開いた。まだ教室に残っていた生徒の田が一斉にそちらへ向く。

そこには女が立っていた。帽子を被り、その下から力強い瞳が覗く。

「一護、てめえ何日バイトやがってんだ！」

「 げ、店長……」

女、もとて、鰻屋育美は多数の視線を気にせず、すかすかと一護に歩み寄る。

「 いい加減来いや！ 仕事がたくさん溜まつてんだよ！」

「 ひつや否や、一護の顔を驚掴みにし引き倒すと、ビリからか出したガムテープでぐるぐる巻きにして、そのまま抱いで颯爽と教室を出ていった。

鮮やかな犯行に、誰も何も言えず、しばらく呆気に取られていた。

一方、拉致されたように連れていかれた一護は、始めは抱がれていたが今は引きずられるようにして歩かされていた。

「 やつぱり高校生男児を抱ぐのは無理か……」

ゼーベーと息を切らしながら言葉は途切れ途切れになつていて。

見栄を張るくらいなら始めからそつじりと愚痴をこぼすと、育美は酷い形相で睨み付けた。

「うつさいわね！ いつどりうす持ちの主婦なんだ、全盛期はどうぞ過ぎてんだよ！」

「じゃあ今は更年期か？」

問答無用、投げ飛ばされる。これで全盛期ではないと言つたら、その頃はいつたいどれほどのじゅうじゅ馬だったのだろうか。

校門の前に止まっていたワゴンに乗せられる。

「育美さん、ちょっと待つてくれ！ バイトは当分休みたいんだ！」

「ああ！？ ふざけんな、先週も休んでたじゅねえか！」

パンパンと手を叩き運転席に乗り込む。エンジンをかける。このまま店まで連れていく気なのだろう。

「冗談じゃない。今日も修業をつけてもらひつもりだし、夏梨のこととで浦原商店へ行こうと考えていた。

「無断欠勤したのは悪かったよー でもビリしても外せねえんだ」

出来るだけ早く完現術を完成させたい。今までは力としても弱い。早く完璧に熟せるよつにならなくてはいけない。

夏梨の身体も心配だ。いくら死んでないと言つても、その抜け殻の状態で時間が経つている。魂魄が戻つても身体が衰弱していくは元も子もない。

「……妹が、行方不明なんだ」

正確に言えば魂魄がなのだが、この際として問題ない。

育美は進行しかけた車のブレーキを掛け、上半身を後ろに向いた。

「それ、いつの話？」

「……一昨日から」

ぶつきらぼうに言葉を吐く一護をじっと見詰めると、額を手で覆い深く溜め息をついた。

「あんたねえ、そういう事は早く言えよ。あたしだってそんな時に仕事を押し付けるほど莫迦じやないんだ」

「育美さん……」

「あたしの方でも聞き込みしてみる。いつ見えて顔は広いからな」

「無理すんな。子供は遠慮なく大人に頼れ！」

「……すまねえ」

その後、育美に自宅まで送つてもらつた。始めは首を横に振つていたが、「黙れ！」と一喝され、結局家まで。ワゴンが見えなくなるとそのまま銀城達がいるマンションまで走る。

その途中、ちよつと買い物から帰つてきた遊子とすれ違つた。

「お兄ちゃん！ どこ行くの？」

「蝶原の方まで！ 帰りは遅えから、さつと寝るよー？」

早口で云え、すぐに背を向ける。

「お兄ちゃん……！」

だから氣付かなかつた。遊子が一瞬だけ、泣きながら顔を歪めたことに。

マンションの扉を乱暴に開けると、一護と織姫、ジャッキー以外みんな集合していた。

テーブルの上にある水槽を見る。

恐らく、今回の修業場。

「……始めてくれ」

「ええ。『あんたを許可する』わ」

ちかちかと光り、水槽の中へ吸い込まれていく感覚。

足に地が着いたと思えば、足首までが水に浸っていた。面を上げると目の前に悠然と立つ姿。

一護は代行証を握り、完現術を出す。

「じゃあ、始めてつか」

ジャッキー・トリスタンは笑った。

＊＊＊

一護が修業を開始したのを確認し、茶渡は銀城に歩み寄った。

「少し聞きたいことがある」

茶渡は織姫から聞いたことを話した。

月島に接触し、斬られたこと。だが疵すら見当たらなかつたこと。

『何でかな……あたし、月島さんのこと知つてた気がするの』

不可解な言動。

銀城は眉をひそめた。

「月島の能力を知りたい。あんた達のリーダーだつたんだ、知つてるだろ?」

嫌な予感がするのだ。雨竜に続いて織姫。だが雨竜が疵を負ったのに対し織姫は無傷。

「月島の完現術に記憶障害や暗示があるんじゃないか？」

織姫が月島を知っていることはないはずだ。仮に互いが知り合いでとしても、それならば月島が織姫を斬る必要なんてない。

銀城は目を瞑せる。

「月島の完現術の名は『ブック・オブ・ジ・エンド』。何でも斬れる刀だが、そんな能力はない」

「……能力が変化したとは？」

「考えられねえ。成長はしても変化はしない」

なら織姫を斬ったのは誰なのだろうか。

能力は変化しない。月島の完現術は極端によく斬れる刀。しかし織姫の記憶に誤差が生じている。

考えられるとするなら、織姫を斬ったのは月島ではないか、銀城達が知っている人物が月島ではないかの一つ。

「石田雨竜にも確かめよう。もし井上と同じように記憶障害が起きていたなら、月島ではない第三勢力と考えた方がいい」

「それはどうかな……」

扉の外からだつた。静かな声が聞こえたと同時に、扉に亀裂が入る。縦に斬られ、暗い室内に明かりが差し込む。その光を背に立つた細身の男。

「月島……！」

「やあ、久しぶりだね」

口許に笑みを浮かべてはいるが、何も映さない漆黒の瞳は無感情。

額から汗が落ちる。

まづい、

銀城は唇を噛み締めた。

ここで月島と一護を接触させてはいけない。まだ早過ぎるのだ。一護の性格から、二人が顔を合わせたら必ず戦いになる。しかし今の彼では月島には勝てない。

「ジャッキーとリルカはどこだい？」

月島の目が水槽に向けられる。そこか、と刀を持った腕を振り上げた。

「 つやめろ……」

止めなければと完現術を出すが一歩遅く、水槽が真つ二つに割れる。

ドン、と異常な空氣が部屋を覆つた。黒い氣が溢れ出る。

『容れもの』を斬つたことでリルカの完現術が解け、一護が姿を現わした。

わずか三十分も経つていなにも関わらず、一護の姿は変わつていた。

死神を思わせる黒い袴。それらはすべて代行証から溢れる黒い氣で出来ていいようすで、代行証を持った右腕は完全に覆われている。

ああ、と茶渡は声を漏らした。

一護の正解も完現術も、『纏つ』能力だったのだ。力を纏つた姿こそが本来の能力を發揮した姿。

一年前、藍染との戦いに終止符を打ち、一護自身の靈圧を消失させ

た最後の月牙天衝『無月』などはまさにそれだ。

「あんたが月島か」

一護の声で我に返り、すかさず臨戦体勢をとる。

月島は刀を構えるそぶりも見せないが、全身から殺気が漏れている。

「おまえら退いてろ……！」

銀城は叫ぶのと同時に月島へ斬り掛かった。

巨大な大剣と細い刀身の刀、それに体格からも銀城の方が有利に思えたが、月島はたやすく彼の攻撃を受け流している。

薄く笑う姿に舌打ちをする。

茶渡は右腕を変化させ飛び掛かった。

轟く破壊音、壁をぶち抜き埃が舞う。

隣接した建物の屋上に月島は軽やかに着地していた。それを茶渡、銀城、一護が追う。

「石田を斬ったのはあんただよな？」

刀のように変わった右腕を身体の前に出し問い合わせる。

月島は笑つたまま何も言わない。

「大虚に俺の妹を襲わせたのも、あんたなんじやねえのか？」

一つ、疑問に思っていたのだ。

大虚の襲来のタイミング、普通ならありえない魂魄の離脱と月島の出現。

虚と人間で境界線を引いていたが、タイミングが合いすぎでいてどうしても別問題とは考えられないのだ。

あくまで一つの仮説。それを浦原に話してみようと思っていたが、本人が出向いたのなら直接聞いた方が早い。

「あんたが大虚に襲わせんじゃねえのか！？」

「どうだと思、う？」

一護は斬り掛かつた。

「夏梨をどこにやつた！？」

鋭い太刀音が鳴る。切り結んだ瞬間、一護の刀は爆発するように威力が倍増する。

だが月島は後ろへ跳躍した。

「さあね、僕は知らないな

「てめえ……！…」

「なるほどね

月島は笑う。

月島を追つて地を蹴る。コンクリートを使役し跳躍を増幅させ、さらには空気を使役することで加速を助長する。

「君が完現術を使いこなし始めてこる」とはよく分かつた

向かいの建物の手摺りに足を着け、完現術する。

一護と同じように跳躍を増幅させ、一護に斬り掛かる。その刃は的確に一護の左腕を狙っていた。

すぐに右腕で防ぐが、その時左腕を纏っていた完現術が解ける。

そのまま蹴られ、落下の緩和さえ出来ずコンクリートに身体を激突させた。

息が詰まる。

戦いの場数なら、ここにいる誰にも負けてはいない。死神だった頃だって何回も死線をぐぐり抜けてきた。

でもやはり違うのだ。生身の身体と魂魄で戦うのは違う。死神の戦い方と完現術者の戦い方も違う。

痛む身体を無理矢理起こして、刀を振りかぶる月島へ応戦しようとした試みる。

力が再び増長した。それは段々とかつての力に近付いている。

「『インウ、エイダーズ・マスト・ダイ』」

突如、視界が黒く覆われた。平面な何かが一護を覆った後、そこに『SAVE』の文字が浮かぶ。

「そつか……完成に近付いた黒崎一護を接触させたくないんだ。だ

「雪緒」

「悪いけどそのためじゃない。野次馬が集まってきたる。まあ派手に戦つてれば当たり前だけじね」

確かに雪緒の言つ通り、下から野次馬の声とサイレンが聞こえる。茶渡の放つた一発で注田を集めてしまったようだ。

背中に何かが押しかれる。

「……『ラブ・ガン』」

「やつをとこなくなつてくれる? あたし、こいつの苦手なんだから」

リルカは子供の玩具のよつな、滑稽な形の銃を円島に突き付ける。

「じゃ、僕達は黒崎を連れて消えるから」

やつをとこなくなつてくれる。円島もそれ以上何かする気配はない。

「何か、おかしい。」

茶渡は違和感を感じた。

これ以上ここに残つても月島が不利なることは分かる。だが、わざわざ自分から出向いたのに、こんなにあつさり退くものだらうか。

様子見に来たのか、いつでも襲えるといふ意味なのか、それとも

ふわりと背後に気配を感じた。さつきまでいた場所に月島がいない。慌てて振り返る。

刀が胸を深く貫いた。

＊＊＊

再び視界が開けた時、前の薄暗い部屋ではなかつた。

何もない、質素な一室。

「はい、ロード完」

雪緒の声に一護は辺りを見回す。

「月島は！？」

「退却した。一応、な」

一護は完現術を解きつつ、銀城の含みのある言い方に眉を寄せた。雪緒の完現術によって閉じ込められている間、何も見えず聞こえずで外の状況がまったく掴めなかつた。

「何があつたのか？」

「……いや、きっとと考え過ぎだ」

そう言う銀城の顔は晴れない。

「一護、力を使って早々に悪いが、次の修業に入るぞ」

焦りからか、余裕のない口調。思ひの外、月島の襲撃が堪えたのだろう。

早く完成させなければ、月島が何を仕出かすか分からぬ。いつも来ても対応できるようにしなければいけない。

「雪緒、準備しろ」

「はあ！？ なんでだよ！ コイツの充電切れそうだし、さつきの
で疲れたしいやだ！」

「プラグ差したまやればいいだろ。それに用島が靈圧を探つてき
たんだとしたら、靈圧を完全に遮断できるおまえの完現術が必要だ」

さつきのよつに、未完成な一護と対峙させることだけは避けたい。

「できるな？」

「……」

雪緒は不貞腐れた顔で頷いた。

ポケットに仕舞つたゲーム機を出して操作する。

再び一護の視界が暗くなつた。

「構えろ、一護」

目の前で大剣を携えた銀城を見てすぐ理解した。

「ああ……」

恐らくこれが、最後の修業。

二人は同時に地面を蹴つた。

＊＊＊

「そろそろですかね……」

店の前で闇に染まつた空を見上げる。

今夜は雲の動きが早い。これは一雨くるな、と浦原は溜め息をつく。

突然、浦原が見つめる先に円形の障子戸が現れた。

「来たか」

隣で夜一が腕を組み、仁王立ちになる。

障子戸が開く。中から漆黒の蝶がひらひらと舞い、その後ろから多数の死神が出てきた。

「みなさんお疲れっス」

へらへらと笑うと、一人の少女が駆け寄り顔面を殴つた。

「！」のたわけが！ 何故夏梨のことを教えなかつたのだ！

「いやっスねえ、朽木サン。死神は全ての魂に平等でなくてはいけないんスよ？ 教えられるわけ……つて、あらっ？」

浦原はルキアの隣に出てきた子供を見て瞠目した。それは夜一も同じ。

当然か。あれだけ捜しても見つからなかつたのだから。

「夏梨サン生きてたんですねー！」

「うん。なんとか」

少し、やつれたように見える。だが黒曜石の田は変わらず爛々と輝いている。

あらー、と感心したような声を出す浦原に、夏梨は飄々と「あたしの身体は?」と尋ねた。

「うひに寝かせてあります。でも戻るのは井上サンに治してもらつてからの方がいいっスよ」

浦原は夏梨の失くなつた右腕を見て言つた。

「今は結界で何ともありませんが、夏梨サン怪我をしたでしょう? それが身体の方にも反映されてましてね」

恐らく、結界を解いた瞬間に本体の方の腕も同じように失くなるだろつ。ならば織姫に『三天結盾』で腕を元に戻してもらつたほうがリスクもない。

夏梨は渋々頷いた。いつ何日も戻れないと流石に不安になつてくる。

「では」

浦原が仕切り直しに、やけに明るい声で言つた。

「始
め
ま
す
よ
」

長かった……

かなり原作のほうを投爆しましたが、次々話あたりで原作抜けると思いません。

戦闘シーンが鬼畜すぎる……

展開が結構早めになつてますが御了承ください……

感想お待ちします。

コソコソと扉が叩かれた。

窓の大きい病室。雨竜は本を読む手を止めて「どうぞ」と声を掛け
る。

静かに開いたといひに織姫が遠慮深げに立っていた。

「急に呼び出しだいめん。来ててくれてありがとうございます」

「へいへん、全然。もつ起きて平氣なの？」

「ああ。いのへりこな」

少しの沈黙。

「…………あのや、怪我、あたしが治せば早く治るよ…………？」

織姫が氣まずそうに言つと雨竜も「やつだね」と頷いた。

「昨日、茶渡から聞いたんだ。黒崎が狙われてこりつて。それに僕

を斬つた奴が接触してゐる

はつと息を呑む。

今日はまだ見ていないが、昨日ようやく完現術を発現できたくらいだ。昨日の今日で完成してこるとは思えない。

一護は大丈夫だらうか。不安で胸が一杯になる。

「狃われたのが僕ならみんなから遠ざからなければと思つていたが、黒崎なら話は別だ」

雨竜は顔を上げて織姫をまっすぐ見詰めた。

「井上さん、この症を治してほしー

* * *

俺が今戦っている奴は、どこを見ている？

一護は思った。自分の相手をしている銀城の剣からは何も感じない。興味、快樂、殺意、寂寥。何でもいい。今まで切り結ぶたびに相手の心が感じ取れた。月島でさえ、ろくに見てもいらないのに殺意だけが刺していくようだった。

銀城はまっすぐ見ている。それなのに何も感じない。

「雑念が多いな」

銀城の声に呆れが含まれる。

「これは戦いだ。修業だって割り切ってんじゃねえよ」

一護はぐつと歯を噛み締めた。

分かっていることだ。それでも相手の心が見えないことに不安を覚える。

敵か、味方か。

「引きずり戻すしかねえか」

そつと言つた直後だつた。ブツツと視界が途切れる。

柔らかい眼球を刃先が通る感覚。

「う……あああああああ……」

咄嗟に抑えた指先にぬめりと血の感触。思わず膝をつき手に顔を埋める。

「……何なんだ……」

浅く息を吐きながら、銀城がいる方向を必死に見ようとする。

勿論、何も見えず闇があるだけ。

「おまえはいつたい何なんだよ……」

「うるせえよ

首を蹴られ、後ろに飛ばされる。

「いいつは本当に味方か?

そう自問しても頷けない。

「おまえ……本当に俺の味方なのかよ……！」

なんとか立ち上がった一護を再び殴り倒す。

視界を断たれ、平衡感覚を失くした身体は簡単によろめき倒れた。

「敵だと言つたら、おまえはどつするんだ？」

銀城の声が上から降つてくる。

「途中で俺達が豹変して襲い掛かってきたら、おまえはどつするんだよ。自力で切り抜けるか？」

笑わせんな。

低く、呟くように言つた声は酷く冷たかった。

「死ぬ気でよけろよ、腰抜け」

問答無用、大剣を振り上げる。それを肌で感じた一護は、すかさず

右腕を前に出した。

鋭い太刀音。

嗚呼、と納得した。

「いっは敵だ。

先程とは打つて変わり、身が竦むような殺気が溢れている。

一護は後退し、勢いよく跳躍した。そのまま右腕を振り下ろす。それを難無く銀城が弾き、身体を捻つて大剣を薙ぐ。

紙一重で避けたのを確認すると、もう一回追撃し下から振り上げた。

刃先が地面を削る音を聞き、咄嗟に身を退かせる。

「思つたより躲すじやねえか

余裕な表情の銀城に対し、一護の息はもう切れている。

「……目が使えないでも、気配や音で動きぐらい分かるんだよ……」

かなりの集中力を要するが、確かに銀城の動きは把握できた。

それは経験からの勘だと思っていたが、その考えは間違っていた。

ぶつりと大剣が肩の肉を裂く。

「どうした、躲せるんじゃなかつたのか？」

違う、加減していたのだ。一護がぎりぎり躱せるよ、つい。

銀城の猛攻が始まった。

容赦ない。先程までなぶるようなものだつたのが一気に一護を追い詰める。

一護が倒れ込んだところへ、腹に突き刺し地面に縫い付けた。

「ぐあ……あああ……」

「終わりだな」

息が出来ない。声も出ない。

用済みとばかりに銀城の足音が遠退いていく。

「チャードと井上を殺す」

一護は何も見えない目を見開いた。

「予想はついてたろ？ 俺が味方じやねえって解つた時点ですよ。心配しなくとも、てめえも殺すさ」

一人の顔が浮かぶ。そして月島に斬られたであろう雨竜の姿も。

必死に剣を抜こうとするが手に力が入らない。

駄目だ。そんなことをさせては。

護らなければ。

その時、光が見えた。

「ああああああああーーー！」

ピリピリと何かが身体を覆う感覚。

「銀城！！」

しつかり見えていた。ぼんやりと銀城の姿を形作る光。

それは靈圧。

一護の右腕に光が集中する。風が鳴る音。

銀城がそれを地面に叩き付けた瞬間、巨大な爆発が起つた。

轟音と熱風。

「よくやつた」

そこに殺氣はなかった。

「完成だ」

え、と顔を上げる。

完現術は完成する瞬間、今までその道具に溜め込まれた魂が一気に解放されるので、必ず誰かが身を挺して抑え込まなければいけない。

巨大な力は術者を殺すことだつてある。

一護の力量を考慮すると、その役をやるのは必然的に銀城だつた。

「だから、どうしても俺の目の前で完成させてもらわなきやならなかつた」

今、銀城の右腕は一護の力を抑え込んだためボロボロだ。

「悪いに、ベタな悪役しか出来なくてよ」

＊＊＊

あたしは田を擦りながら、学校から出た宿題に必死に取り組んでいた。

数学は嫌いじゃないけど、一問解くのに三十分も掛かる問題をたくさんやりたいとは思わない。

ふあ、と欠伸をする。

時計を見るといつも夜中の一時になつたところ。

そろそろ風呂に入るか、とシャーペンを置いた時、携帯が鳴つた。

知らない番号。取り合えず出ると、すぐ懐かしい人からだつた。

幼い頃、よく一緒に遊んでくれた人。空手であたしが一護に勝つといつも褒めてくれた。一護もその人を見るとすぐに泣き止んで、嬉しそうに笑つてたつけ。

最近、一護が夜遅くまで帰つてこない、遊子ちゃんが心配してるとその人が電話越しに言つた。

啓吾や水色も呼んだから、あたしも来ないかと誘われた。もちろん一いつ返事で返し、すぐに家を出る。

まつたく、可愛い妹をほつて置くなんて。少し説教してやろう。

* * *

久しぶりに家に帰る気がした。

雪緒の完現術でゲーム機の中にいたのだが、何日もいた気がして実際は九十分しかいなかつた。

それは雪緒の心遣いで『早送り』をしてくれていたらしい。

それと、茶渡が織姫を連れて来たようで、織姫は一護の痛ましい姿を見た瞬間、泣きそうに顔を歪めていた。

銀城から受けた疵も治り、目も元のように見える。

雪緒が完現術を解く前に、一度完現術が本当に完成しているか確認してみたのだが、その姿に茶渡、織姫、それに一護自身も驚いた。

なんとなく、レスレクシオン破面が帰刃した姿と重なった。

代行証も小刀に変わっていた。

内なる虚が関係しているのだろうか、と一護は夜道を歩きながら考える。

「ただいま……」

遊子は起きているだらうか。きっと心配している。

そう思っていたが、パタパタと奥から走ってきた遊子の顔は明るかつた。

「おかげで、お兄ちゃん、やっと帰ってきたー。」

「お、遅くなつて悪い……」

良かつた、と安心する反面、父の姿が見えないのが気になる。

ずっと一人だったのかと思うと、兄として失格だなと苦笑した。

「あのね、今日は懐かしいお密さんが来てるの！ 誰だと思う？」

こんな夜中に来る知り合いなんていただろうか。

（……いや、いるな）

頭の中に浦原やルキアなど、かつての死神の仲間達が浮かぶ。

だが彼等を遊子は知らない。

「ヒント、いとこの中かです！」

「ことじー？」

確かにそれは懐かしいと瞬間に顔を覗かせた瞬間、息が止まつたような気がした。

「ね！ びっくりしたでしょ！ お兄ちゃん、ショウちやんだよー！」

月島。

遊子の声も耳に入らない。

何故、こいつが此処にいるんだ。

何故、遊子はこいつを知っている。

“いとこ”って何だ。

「やあ、“一護”。久しぶりだね

distortion (後書き)

今回は少し短いです。

とにかく修業のシーンが終わって良かった(・・・)

かなり展開が速い気がしますが、ご愛敬で(^ ^ P ^)

あたしの両親は、すぐ暴力を振るう人達だったらしい。

赤ちゃんだったあたし。

あたしが殺されると思って、あの人があたしを連れて逃げてくれた。

だから、

あたしはいつも貴方の疵を治してみせるよ。

丹島さん。

時よ、どうか止まってください。

このおかしな空間を壊してください。

こんな茶番、終わらせてくれさー。

「久しぶりだね、一護」

「久しぶりに夕飯いつしょに食べたんだよ！ 夕方に急に来たから
びっくりしちゃつたー！」

「じめん。迷惑だったかな」

「ううんー。ショウちやんと食べるじ飯楽しかったー！」

「こいつは、敵で。俺を狙っていて。

夏梨を大虚に襲わせた

考えるよりも早かった。まるで家族の一員のように寛いでいる円島の胸倉を掴み上げる。

「止め……！」何してんだ………」

「お兄ちゃん！？」

胸が苦しい。ありえない、信じたくない。

「待って、お兄ちゃん！ 何してるのー？」

遊子が腕を引っ張る。まるで俺がおかしくなったみたいな、じつが大切な人みたいな言い方。

「ショウちゃんが急に来たことに怒ってるのー？」

やめてくれ。その名前を呼ばないでくれ……

「遊子！」何しやがった………」

「いいんだよ、遊子。一護は眞面目だから、やつといんな時間まで

家にいた僕に怒ってるんだ

「 答えろーーー 」

『 気安ぐ遊子の名前を呼ぶなよ。おまえは敵だろ。知ったよいな口を利くなよ。 』

何の冗談だ？ 何でこんな……

その時、インターホンが鳴った。

「 あ、遊子、出であげて。 」

たぶん、啓吾達だ

「 うーーー 」

玄関から声が聞こえる。たつき、啓吾、水色の。

「 秀さん来たよー 」

啓吾……

「あれ、なんだー護もいるじゃん」

「ほんとだ」

「エエ、一護ー あんた最近、夜遊びしてるらしいじゃないー。」

居間に入ってきた三人。学校で別れた時と何も変わっていない。でも、

「今晚は、秀さんー。」

「秀さん、久しぶりー！」

違つ、なんで、何が起きているんだ……？

遊子だけじゃない、この三人は月島を知らないはずだ。ましてや俺の従兄弟なんかじゃない。

「久しぶりだし、みんなに会いたくてね。そう怖い顔するなよ。明日は日曜日だしいいだろ」

それは昔からの知り合いのような口ぶり。

「…………そりだ」

おかしこのせ、

「チャヤと織姫も浮ぼりつか」

俺か？

ガシャンッ

気付いたら殴っていた。

窓にぶつかり、派手に割れる音。

「丹島…………あえぬに向しゃがつた…………」

「…………あえよ…………」

呼吸が、息がうまく吸えない。

何より恐ろしい。今の俺の立場は、いつたいどうなつてるんだ。

「月島あーーー！」

三九...
...九三

みんなに何したんだ……

「大丈夫！？」 月島さん！」

たつきと姫が駆け寄る。

「一謹一あんた何してんだよ一」

たつきが、こんなふうに怒鳴るのは何度か見たことはあった。でも今たつきが護つてるのは丹島で、敵意は俺に向いていて。

「あんたが何にいらついてんのか知らないけどさー、久しぶりに会つた親戚に何だよここれは！ あんた丹島さんのことあんなに大好きだつたじやない！！」

「たつや、違ひ……俺は……」

「何が違ひだよーー！ いいから謝れーー！」

「 護」

「お兄ちやん」

「元気だったの、本当に」

「おかしこや、おまえ」

「 護」

堪えきれなかつた。

割れたリビングの窓から外に飛び出した。

靴なんて履いてないが関係ない。

啓吾の声が後ろから聞こえたが、それすら恐ろしかった。

みんな、違う。俺はおかしくない。

これが……田島の能力なのか……？

田の前に白塗りのゴゴンが止まる。

「——護じやねえか。何があった？」

育美さんに店まで連れていかれた。頭を整理するのに調度良かつた。

「落ち着くまでいな。何があつたかは話したきや話せ」

「うこう時、本当に助かる。

いつもは田茶苦茶だけど、やっぱり大人だ。

突然インター ホンが鳴り、育美さんが出ていく。

誰かに言えないのがつらい。嘘だと信じたい。

誰でもいい、

「一護、良かつたな！」

誰か、

「円島さんが迎えに来てくれたぞー。」

嘘だと叫ってくれ

* * *

たつた数日だったが、浦原商店から家までの道のりは酷く懐かしかった。

いまルキアと浦原は一護に死神の力を取り戻せる準備をしている。暇になつた夏梨は、出来たら一度家に戻りたいと申し出たのだ。

魂魄のままなので遊子には姿を見せることは叶わないが、遊子の元気な姿を確認したい。

夏梨は小さく欠伸をした。

もう夜中をとうに過ぎだ時間だ。きっと遊子は寝ているな、と苦笑しながら家に入る。

鍵は掛かっていなかつた。電気もついていない。

変だ。

そこには違和感があつた。

何とはなしにリビングへ向かう。

「窓が割れてる……」

破片は片付けられたのか見当たらなかつたが、大きく割れたところから風が入り込んでいた。

ふと、テーブルの上にメモが置いてあるのに気が付く。

『お兄ちゃんへ

シユウちゃんの別荘にみんなといるから、ちゃんと来てね！

絶対だよ？

遊子より

「誰だよ、シユウちゃんって

自分がいない間に友達でも出来たのだろうか。にしても別荘だなんて金持ちだな。

そんな事を考えつつ家を出る。空を見上げるが、月は雲に隠れていて暗い。

「一兄妹…………」

わずかに感じる一護の靈圧。そこに複数の、知らない者も混じっていている。

夏梨は歩き出した。

＊＊＊

月島から逃げるように店から飛び出した一護は途中、銀城と合流した。

銀城から聞いた話は希望を削ぐのに十分だった。

リルカも、沓澤も、雪緒も、ジャッキーも、全員月島に“やられて”いた。

正気なのは彼等二人のみ。他の者からしたら正気ではない二人。

月島の能力は『記憶の操作』。自身の存在を斬つた相手の過去に挟み込む。

だから彼等にとつて月島はずっと“そこにいた”親友で、恋人で、家族なのだ。

そして、その“深い繋がり”は月島を殺したところで断ち切れるとも限らない。

最悪、護りたかつた相手に人殺しとして怨まれ憎まれ、“異常”と思われ続ける。

それでも、殺すしかないのだ。

「あーあ、物騒な相談してんのなあ」

突然の声に振り返る。

「やつぱつ、びつかしちゃつたんだね、空姐」

足音と共に雪緒が現れる。田には憐れみの色。

「さあ帰ろ。大丈夫、すぐにまともに戻してあげるよ」

鬱蒼とした森を抜けると田の前に古びた洋館。

扉から月島が出てきた瞬間、一護は代行証を握り駆け出す。

「待てー。」

銀城の手が一護の腕を掴んだ。

「考え無しに突っ込むな。奴の能力が俺の予想通りなら、一回斬られたら終わりなんだぞ……！」

その言葉にぐつと堪える。

冷静さを失つてはいけない。それが命取りになるかもしれない。

「よしなよ。僕は君達と戦いたいわけじゃない。中で話そう」

「……わざわざ罠が張つてあるかもしだねえ屋敷の中なんかに入るかよ……」

「冗談だろ？ 罠を張るなり、ここへ来る途中の森の中に仕掛けるや」

それが真意なのかさえ分からぬ。もしかしたら罠が張つてあるかもしれない。

だが、一歩踏み出さないことは始まらない。

恐る恐る入ると、照明が付き小さな破裂音が鳴つた。

鼻を擗る火薬の臭い。

そこにはクラッカーを持つたみんながいた。

遊子、龍貴、留吾、水色、竇美……

みんな
月蠍と“深い繋かり”を持つ者

「良かつたね、お兄ちゃん！ シュウちゃん全然怒つてないって！」

一 良かうたなー護! さあんと今ひかへる謫り玉奴! 」

「そうだ」

一 謝つときな

「謝りなよ」

一
謝れ

彼等の言葉は、一護の心に突き刺さる。

護りたい者達なのに、まるで敵陣に踏み込んだよつだ。

いや、これが月島の狙いなのだろうが。

みんなの声を振り切り、階段を駆け上がる。

今すぐ月島を斬つてやりたい。だがそのまま戦えば、みんなを巻き添えにしてしまう。

階段を上りきった一番手前の部屋に入ると、まるで待っていたとばかりにリルカやジャッキー、沓澤がいた。

「良かつた。どうやらお元氣そうだ」

彼等も、月島の仲間で

「ああ。僕も安心したよ」

背後からの声にすかさず身を翻し後退する。背中を見せてはいけない。斬られてはいけない。

遅れてきた銀城が、竜貴達が上がつてこないよつて階段を破壊した。

「全力で戦え、一護！！」

代行証を掴み、完現術を発動させる。

月島は向かってくる一護に対し棘を刀に変形させるが、認識するよ

りも早く左腕を切断せられた。

血が溢れ、いつも表情を崩さない顔を歪める。

「それが君の完現術か……！」の短期間でよく成長した……！」

「……せいぜい今のうちに余裕ぶつてろ」「

刀を構えなおす。

「俺はてめえを殺しにきたんだ！」

視界の端、窓に何かが映った。直後、破壊音に砂煙が舞う。

月島を庇つよつて立つ二人。

「チャド……井上……」

予想はしていた。つらい現実。

「『双天帰盾』」

織姫の立花が丹島の腕を治す。彼女の瞳には憐れみ。

「さすがだね。こつも通りす」「治療だ」

治つた腕を動かしながら言つと、織姫は嬉しそうに笑つた。まるで親愛する兄に向けるような笑み。

茶渡が一人の前に出る。

「チャーデ……」

やつぱりお前ひも回じなのか。

やつぱりねれば茶渡は困惑する。

「『回じ』の意味が分からぬ。一護、おまえはひつてこんな事をしているんだ……！」

「黒崎君……今までずっと丹島さんに助けてもらつておいたことを忘れちやつたの……？」

織姫の憐れむよつた顔は変わらぬ。

「朽木を助けられたのも、藍染を倒す」とが出来たのも、全部月島さんがいたからじゃないか！」

嗚呼、

「理解、出来てるかい？」

彼等の過去と、自分の過去は違う。月島によつて変えられてしまった。

今、彼等の過去は月島と共に歩んでいる。洗脳ではない。“事実”なのだ。

「君だけが、誤った過去を歩んでいる

それは死刑宣告にも似ていた。

「君だけ違つて寂しいだろ？　だけど安心していい

本当に狂えたら、どんなに楽なのだろうか。

「すぐに、その想いは最初から無かつたことになるから

殺す。

振り下ろした刀は織姫によつて阻まれる。

右手からの茶渡の攻撃。それをきり替りて押さえ込む。

「…………やつしてだ、一護……俺はおまえを殴るために強くなつたん
じゃない……！」

茶渡の左腕が光る。

それは破壊するための腕。
一護を敵と見なした証拠だつた。

「『惡魔の左腕』」

ドン、と巨大な力が爆発し壁を破壊する。

なんで、なんでこんな事になつたんだ……

力を取り戻したかつたのは、彼等を護りたかつたから。

「俺はいつたい何のために力を取り戻したんだ！！」

それなのに、仲間と戦わなくてはならない。

「月島あ！！」

上段から振り下ろした刀を難無く受け止められる。だがその隙に横から脇腹を蹴り飛ばした。

一線を描いて屋根に落ちる。

一護は刀を構えた。

「『月牙天衝』！！！」

横に難いだと同時に斬撃が放たれた。

完現術と死神の力の融合。

月島は危うく弾き、背後の森へ斬撃が飛ぶ。

轟音、ビリビリと空気が震えた。

「……参ったな……」

さつきの攻撃で焼け焦げた自分の右腕と、絶望と憎しみを瞳に宿した一護を見て笑う。

「これ、もう仕上げでいいんじゃない?」

奇しく呴かれた言葉は、一護に届くことなく闇に消えた。

次回からオリジナル入れるだろ?つか……

はやく死神の皆様と夏梨ちゃんを出してたい! (^O^ ^O^)

それとあの人も……

最近、原作ばっかりですみません(、 、)

感想お待ちします。

眩しい笑顔の貴女は誰だろう。

左手からジャッキーの蹴り、前から沓澤、上へ避けねばリルカの『ラブ・ガン』。

一護の方にも加勢に行きたいが、こいつらがつづつたくて仕方ない。

それにしても一番厄介なのはこの餓鬼だ。月島が連れていた獅子河原とかいう坊主。

いつの間にこんな奴を見つけたのか。

馬鹿面してパンチ一つたいした威力はない。だが奴の完現術にかかれば、そんなふざけたパンチでも骨を折ることが出来る。

『ジャックポット・ナックル』。

確率を操作して大当たりの出目を引き出す能力。

「余所見なんて余裕じゃないかい

目の前に蹴りが迫る。

俺は窓を割つて外に飛び出した。空気を使役して足場を作る。

流石に四対一は分が悪い。せめて坊主だけでもいなくなれば楽になるんだが。

一護の方を見る。

井上とチヤドガ円島の面になつて上手く手が出せないようだった。

酷なことをしゃがる。

「円島あ！――！　出てきて、てめえが戦えよ――！」

やばい。

直感でそう感じたのと同時だった。

円島が一護の背後へ回る。

一護は斬らせちゃなんねえ。

俺は空を蹴り、一護と円島の間合いに入る。

刀が肩からめり込んだ。

「銀城！！」

落ちていく。一護を庇つた彼は月島に斬られた。

どうなるのだろうか。銀城も彼等と同じようにならぬ月島を『味方』だ
と思つてしまふのか。

そうした時、どうすればいい？

「大丈夫か銀城！！」

お願いだ、あんたまでいなくならないでくれ。

「銀城！！」

「…………」

呻きが聞こえた。頼むから、と切に願つ。

「…………つるせえな……俺にばっか気を取られてんじゃねえよ……黒崎……」

つらそうに顔を歪めてはいたが、彼は『彼』のままだった。

そのことに一護の瞳は少しだけ、光を取り戻す。

後ろから迫っていた月島をすかさず薙ぎ払った。

「銀城、大丈夫なのか！？」

「…………分からん」

なんとか上半身を起こし答える。

「ただ、今はまだあいつを敵だと認識しているし、おまえのことを仲間だと思ってる」

「そうか……良かった……！」

彼が『彼』でなくなつたら、それこそ独りだ。そしたらもう自分一人では月島には勝てないし、彼等を元に戻すことも出来ない。

だが、タイムリミットも近付いている。

銀城に能力が発動する前に月島を倒さなければいけない。

それが出来なかつたら、そこで終わりだ。

タン、と何者かが背後に降り立つた。

振り返り見れば、そこには病院で入院しているはずの雨竜。

どつちだ……！？

一護の中に疑惑が渦巻く。

彼も月島に斬られたであろう一人。疵が治つてこることなどとは織姫が治したということ。

仲間か、否か。

「石田……！」

雨竜は銀嶺弧雀を静かに構えた。

「やつぱつ……おまえもなのかな……」

かつての仲間は、みんな月島の仲間になつてしまつた。

「黒崎、 じつちへ来い。 下の階の様子を見た。 安心しろ、 僕は味方だ」

なら何故、 武器を向けるのだ。 もはや銀城以外、 信用できない。

「どうした。 早くしろ、 黒崎……」

麗だ。

「黒崎……ーーー」

雨竜の声が響いた。

「解らないのか!! 僕を斬ったのはおまえの後ろにいる奴だ!!」

振り返るよつ早く、 銀嶺弧雀が放たれる。

それを弾いた剣で銀城は一護を斬った。

「黒崎……」

叫んだ彼の背後に月島が迫り斬り付ける。

銀城は腹の底から笑った。まるで、計画通りだとでも言つよつ。

「銀、城……なんで……」

絶望。彼だけは信じていたのに。

膝から崩れ落ちた一護は戦意を全て削がれていた。

やつぱり、月島の能力で……

「勘違いするな。俺は月島に斬られておまえの敵になつたわけじゃない

月島に一度斬らせた、元に戻つたんだ。

「貰ひぜ、おまえの完現術」

胸に大剣が突き刺さった。

ぽつり、ぽつりと空から雨が落ちる。

雨竜を斬つたのは月島ではなかった。

銀城が斬り付け、そして自分を月島に斬つてもいい、“敵”として過去を挟み込んだ。

絶対に悟られないために。

一護の身体を纏っていた力が吸收されていく。

何の力もなくなつた代行証が手から滑り落ちた。

雨が降る。

護りたい者を護れなかつた。それどころか、よつやく取り戻した力が消える。

みんなは、ずっとこのままなのだろうか。

夏梨は……？

「あ……あああああああ……」

雨が体温を奪つ。

よつやく得た一筋の光は、彼を容赦なく絶望へ突き落とした。

喪失感。

叫んで、叫んで。それでもこの胸の穴は治まらない。

「……泣いているのかい。可哀相[可哀想]」

同情の欠片もない。

始めから仕組まれていた茶番劇。敵である男を信頼し、力を得たと密かに喜んだ姿はさぞかし滑稽だったであろう。

「好きに泣かせといてやれ、そいつにもう用はねえ」

そして恐らく、もう会つともない。

銀城は背中を向けた。

「……返せ……返せよ……」

「何言つてんだ？ おまえ。元々、俺のお陰で取り戻した力だらうが。俺が貰つて何が悪い」

答えるのさえ面倒臭そうに言い放つ。彼にとつて興味があるのは一護の力であつて、それがなくなつた一護はもはや対象外なのだ。

無用。殺す価値さえない。

「用済みのくせに命も取らねえんだ。礼の一つも言つてくれよ

この男はまだ非情なのか。

遠ざかる背中。このまま行かせてはいけない。さつと一度と会わない。

「銀城……！」

立ち上がつた一護の胸を、背後から刀が貫いた。

月島か……？

そつ思い、ゆつくりと振り向いて見たのは、最近見なかつた父と、戦い方を指南し死神として育ててくれた浦原の姿だつた。

「……親父……浦原さん……」

手が刀に触れる。嘘だと思いたくて、でもそれは確かに存在を示していて。

これ以上、何に絶望すればいいのだろうか。

「……そりがよ……」

刀の刃を握りしめる。

「親父達まで……そりがよ……」

琥珀の瞳から、雨とも涙とも分からぬ涙がこぼれ落ちた。

「……馬鹿野郎、俺じゃねえよ」

一心は駄くちづけ言つた。

一護の耳に、一人ではない何者かの姿が形作られていく。

「 もう見えてるはずだ。その刀を握つてんのが誰なのか 」

光つて見える靈圧は酷く懐かしい者のだつた。

記憶に残る姿より髪は短い。前は何もしていなかつた腕に副隊長を示す腕章。

「 ……ルキア」

刀が光り、風を巻き起こした。

そこから自身に流れ込んでくる力。懐かしい魂の一部。

漆黒の袴に身を纏い、鋭利な刃を持つ巨大な刀を携えた姿。

彼の横に立ち並ぶようにして現れた死神達。

「 はつー」

銀城は吐き捨てるように笑つた。

「 良かつたじやねえか、黒崎。死神の力が戻つてよお」

スッと繰ねられた田は獣のよつてがわいつこじた。

「みんなを元に戻せよ、田獣……」

「僕が素直にやつすると思つかい?」

挑発的な態度に一護は眉を寄せた。

やはり、殺すしかないのか。

ぐつと柄を握る力を込める。

動き出しつゝして、一護は固まつた。

「……お兄ちやん!」

下にいるはずの遊子が立っていた。

* * *

「まんとこ一護の奴、じつしちまつたんだる……」

路智がまつりとしゃいた。

“ 月島とあんなに仲が良かつたのに ”

「お兄ちやん……」

遊子は服を握りしめた。“ 大好き ” な月島と兄が喧嘩なんにしてほしくなかつた。

それにしても、何故あんなにも憎々しげに月島の名前を呼んだのだろうか。

“ 昔 ” はいつも月島にへりついて、それこそ世界の中心が彼だと思えるほど一緒にいたの。

ぽつ、と水滴が窓を叩く。

「 雨……」

ふりじと窓に近付き、思い切り開けた。

「ひよひ、遊子ちゃん！？」

冷たい雨が容赦なく降り注ぐ。

竜貴はぎょとじて駆け寄るとすぐに閉めた。

「何やつてんの、濡れちゃつよー？」

水滴が髪を伝い、床に水溜まりを作る。

竜貴が急いでタオルで拭くのも関わらず、遊子は呆然と外を眺めていた。

「……泣いてる……」

小さく呟いた。

はっとして見ると、遊子の頬からぽたぽた涙が落ちる。

「お兄ちゃん、泣いてる……」

遊子はくしゃくしゃに顔を歪め、竜貴の手を振り払い外に飛び出し

た。

雨は嫌い、大嫌い。

だって大切な人を奪つたから。

……誰を？

誰を、奪つたんだつけ……？

雨は身体の体温を奪う。

遊子は建物の裏へ回り、そこにあつた非常用の螺旋階段を駆け上がつた。

「……お兄ちゃん！」

雨の中、見慣れない者達と立つ兄の姿を見付けた。

巨大な刀、黒い着物。

何も知らなかつた遊子は一瞬だけ目を見開いたが、すぐに月島へ顔を向けた。

「……ひつたんだい、遊子。ここは危ないよ、下でみんなと待つてて
つて置つただる。」

「……シユウちゃん……お兄ちゃんの力、返してよ……」

ボロボロと涙をこぼす。

靈圧が異常に飛躍する。

「黒崎、おまえの妹、……」

田番谷の言葉に、いくつと睡を飲み下した。

感情が高ぶつてこるせいが、安定しない靈圧。上がつたり下がつたり、非常に不安定で、これでは虚を呼んでしまう。

「遊子、落ち着け……」

「だ、つてえ……お兄ちゃんを、泣かしたからあ……つ

嗚咽を漏らし、震える声でなんとか言葉を紡ぎ出す。

頭を抑え、その場にしゃがみ込んだ遊子に今すぐ駆け寄りたいが、
迂闊に月島達から田をそらせられない。

「シユウ、ちやん……あたし達に向かったの……」

『遊子……？』

「僕は何もしていなによ」

靈圧がさりと高まつた。

「じゃあ、なんで……つ、おゆれんせ“こる”のこ、記憶こまいな
いの……？ なんでシユウちやんが代わつてこるのは……つー？」

『うつこつこつだ、ヒー護の頭の中は真っ白になる。』

遊子は両手に顔を埋めた。

頭の中で、たびたびノイズのよつと走る黙。

『中の夢。

『遊子』

『うつふふぬは、む意こいなこ。』

* * *

あたしは急いで遊子の後を追つた。上に続く階段は屋上に出る。すぐこじやがみ込んだ遊子ちゃんを見付けた。

死神になつた一護も。

それだけじやない。去年短い間だけ同じクラスだった朽木さんも、その他死神達もいる。

一護は円島さんに刀を向けていた。

「一護……」

雨こも負けない声で叫ぶと、なんどと叫びついに田を見開く。

「一護、なんでだよ……なんで円島さんに刀を向けてんだよ……」

なんで。

「小ちい頃はずっと一緒にいたじゃんかーー！」

「わっ たこぼせー、丹島さん！」付いていた一護。

まだ、あたしが『たつきちゃん』で呼ばれていた頃。

空手であたしに負けて、すぐに泣いて。それでも丹島さんが来ると嘘みたいに笑って。

「たつき……」

一護の顔が歪む。

『たつき』

あれ……？

「たつきちゃん、違うよ……

遊子ちゃんが鳴咽を漏らして泣く。

何かが違う。

でも、何が違う？

『たつあちやん、一護をよろしくね』

初めて一護に会った時、わざとたのは、誰だった？

記憶を手繕り寄せる。一護のやばばこのせ田島さん。

それじゃあ、この嘘みたいに綺麗な女のは誰だっけ……？

「一護……」

いつからあなたは、『たつあ』って呼ぶようになったんだっけ……？

「真咲って、誰……？」

『初めまして、たつあちやん。真咲おばあんて呼んでね』

「ねえ……あたし何か忘れてる……？」

胸が苦しくなる。

「 ひ、円島……てめえ……！」

一護が激昂する。遊子ちゃんが泣いている。

「 たつき、遊子、君達は何も忘れていいな！」

「 円島あ……！」

あたしは何を忘れた？

頭が痛い。

七年前に、あんたが失くしたモノって何？

「 ……を、消さないで……」

空気が重くなつた気がする。息がじづらい。

力が足から抜けて、地面に膝を着いた。

「 お母さんを、消さないでよ……！」

視界がぐらぐらと揺れて、耐え切れず倒れそうになつた身体をなんとか支える。

“お母さん……”

『お母さん……』

嗚呼、やつれて笑つたのはあんたで、

泣き虫があんたの頭を撫でたのは、あんたのお母さんだつたね。

嘘みたに綺麗な真咲さん。七年前、雨の日こぼくなつた

「みんな、此處にいたのね」

そんな声が聞こえた気がする。でもきっと空耳だ。だつてありえないもの。

あたしの意識は闇に沈んでいった。

He meet her again. (後書き)

月島さんの能力、勝手に『自分の存在を誰かと差し替える』ことも出来るようにしてしまったけど、大丈夫だろつか……

題の『He meet her again.』

一応、二人に掛けてます。

一人はもちろんルキア。

もう一人はあの方です。

きっと皆さんお気づきですよね(^ ^ ;)

ここまで閲覧ありがとうございました。

まだまだ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7741x/>

El loto florece eternamente.

2011年11月23日14時48分発行